

578-140



1200501520631

578

140

口

複

写

29.10.29

高橋源一郎編

武藏野歴史地理 第一冊



東京北郊
總論

卷頭言

一、著者が武藏野と縁を結んだ最初は大正三四年の交にある。同四年の冬著者は武藏野の古風俗、古習慣は秩父の山中に残つて居るべしと考へ、村山地方を経て、秩父隨一の僻境といはるゝ名栗村白岩部落及び浦山村冠岩かむい部落に至つた。是れ著者が相當の用意と計畫とを以て、武藏野の旅行を企てた第一歩である。されど當時はまだ本書編纂の志はなかつた。

一、本書の起稿は其翌五年の秋に始まる。學界の先輩數氏と北豊島郡石神井城を見に行つて、歸來見聞を書き留めて置いたのが、本書起稿の端緒となつた。其後間もなく武藏野全部を踏破し、而して其踏破した跡だけ記載しようと決心した。一切机上の推定はやらぬことに心を

定めた。

しかし、この決心は屢、動搖した。第一に先立つものは時と金とである。されど著者には此兩方とも缺乏して居る。武藏野狹老と雖、四方八百里に餘るといはれた大野である。とても其全土を踏破することは出來ない。いつそのことやめてしまはうかと思つたこともある。否々待てよ、机上の推定をやらうではないか、と思ひ直して參謀本部の地圖と古地誌と首つ引きしたこともある。しかし、是はどうも面白くない。且又當初の決心にも反く。故にかくして出來た原稿は皆々破棄してしまつた。第二に前に書いたものを後で讀んで見ると、どうも氣に入らない。まるで名勝地誌に毛のはえた様なものである。下らぬ題目をこねまはして、あたたら有爲の時を過すべきではない。いつそ棄て、しまはうと思つて原稿を塵埃堆裡に放置したこともある。されど若干

月日たつて讀んで見ると、まんざら棄てたものでもない。少しは汝の研究した新材料も這入つて居る。題目が陳腐だからとて、瓦を磨いて珠となすは汝の努力如何の問題である。陳腐な題目に珍奇な研究をせよ、と自問自答して又仕事に取りかゝつた。何としても武藏野全土を歩かなければならぬといふので、時を盗んでは膝栗毛に鞭つた。而して今は殆ど武藏野全部を歩き了つた。場所によつては十數回行つた處もある。原稿は殆ど全部五六回書き換へた。

大正五年稿を起してより十餘年を経て、今日漸く其一部が出來上つた。思へば汝難産なりし武藏野歴史地理よ。

一、題して武藏野歴史地理といふと雖、必しも純正のヒストリカルゼオグラフィ歴史地理のみの記載ではない。著者の足の印したる地方にて、著者の歴史の眼、趣味の鏡に映じたものは一切を網羅した。村、町に行つては村、町の變遷發達

を考へ、また其處に生れ死したる人の經歷を探り、古城址に至つては、興廢の年代は勿論、城主の事蹟を論究し、古戰場に遊んでは其戦ひの原因發展經過を考察した。神社佛閣、古碑古墳すべて其歴史的の考量を試みた。名勝地に遊んでは思ふまゝに眺囑雅遊の慾を恣にした。其等の結果を集めて本書が出来上つた。

一、殊に著者は地方經濟生活の發達に留意し、農村の興隆と新古市町宿驛の盛衰と、交通線の變遷及び産業の變動を明かにすることを努めた。本書の一部には著者の聊か心意を注ぎたる武藏野開墾に關する總括論を附載する。有體に申せば、著者は百姓の子であるから、武藏野の土地開墾及び農人生活の歴史を研究せんと志した。それが遂に邪道に陥つて本書の述作となつたのである。

一、本書は元より著者の道樂心より發した。されどまた若干の小理想も

ないでもない。武藏野の歴史地理に關する古人の著書少なからずと雖、未だ充分に研究し盡されたといふわけではない。前人未發の分野はまだ相當に残つて居る。加ふるに今後の世の中は忙しくなつて來るから、村の歴史の大半は今の老人の世を去ると共に、湮滅し去らんとするの傾向がないでもない。故に今の内に出来るだけの闡明をして置きたいと思つた。變り行く武藏野の面影を此冊中に巻き込めて置きたいといふ小さな願望もあつた。武藏野の若き人々には老人の代りとなつて古物語を傳へ、武藏野を行遊せんとする同好の人士には案内の役目をなさんとするの願望もあつた。

一、されば成るべく事實は豊富に正確にし、文章は成るべく平易にせんことを努めた。されど歴史的研究であるから、何としても古記録、古文書類を多く引出すことを免れなかつた。只成るべく是を少なからし

むることに努めた。中には古文書、古記録の文句を改め、たゞ其意味ばかり取つたものも多くある。時と場合とによりて色々な方法を應用した。

一、著者は専門の學者には本書の如き述作よりも、寧ろ本書述作に用ひた材料を其儘提供するのが一層有利だといふことを知つて居る。故に能ふべくんば材料集を出さんと欲する。然れども今直ちに之を實現し能はざるを奈何せん。

一、著者は本書に用ひた材料の出處を明記せんと努めた。然れども文章の簡略と印刷の簡易とを期するが爲省略したる處も少くない。

一、本書記載の村高及び戸口は、それ〴〵の時代に於ける徳川幕府の調査と、各地村明細帳、宗門改帳等に依據した。然れども昔時の石高及び戸口の計算は甚不統一である。時代により、又村により、調査の目的に

より、それ〴〵計算の標準を異にして居る。紙上に顯はれたる數字が實際の石高戸口を示さぬ場合が往々にしてある。故に單なる數字の比較のみを以てしては徹底せぬ憾みがある。然れども大體は是に據つて判斷し得られる。若夫れ爬羅剔抉精細の検討の如きは、農村記録の多く散佚したる今日到底なし得ることではない。

一、前述の如く本書は著者が實查の結果になつたものである。故に實查せざる場所は記載しない。山でも川でも海でも、實查せざる處を記載して誤を傳ふるよりは、寧ろ記載しないが賢なる方法だと思つたからである。讀者幸に甲を記載して乙を記載せざるの不權衡を咎むる勿れ。

一、本書は過去を知るに専らである。故に敢て現代を閑却するといふにはあらねど、村々町々の現勢は大概に附したところが少くない。思ふ

に武藏野村里の一般的發達は明治大正昭和の今日ほど著しき時はない。其の詳論精説、幕府時代との比較研究は頗る興味ある題目である。是は別に一部の書となすのが便宜である。

一、近來東京近郊の變遷は日一日に著しい。去年行つた處を今年行つて見れば最早變つて居る。最初の内こそ一々其の變遷を調べ直して廻つたが、とても追ひ付かない。つくづくあきれ果て、何故にこんな仕事を始めたかと後悔した程である。されど翻つて考ふるに、舊稿を保存するのは舊狀を語る最も有益の手段である。故に中頃よりは一切舊稿を改めず、只必要だけの補足をするこゝとした。

一、本書の編述に當りて著者は謝すべき人の實に多くを有する。就中最も甚深の謝意を表せざるべからざるは、過去現在の恩師及び先輩親友の三四家である。本書の成る一半は實に如上諸大家の御蔭による。

一、殊に著者は多年徳富蘇峰先生の修史室、故吉田東伍先生の編輯所に於て幾多の藏書を借覽するの榮を有した。又東京帝國大學史料編纂掛所藏の文書記録の類を借覽するの榮をも有した。其爲本書の編纂に多大の利益を得た。こゝに特に深厚の敬意と謝意とを表さなければならぬ。

一、著者はまた先年東京府の命によりて、府下の古文書古記録の類を調査した。東京府民政史料といへる小冊子をも編纂した。其當時手帳に書留め置きたる材料の本書編纂に役立てることは申すまでもない。

一、著者はまた現代各方面の學者の著述論文によつて教へられたことも少くない。殊に地名の解釋に就いては柳田國男氏の説に従ひ、また其説によつて啓發せられたところが多く、考古學上の事に關しては其道専門諸家の意見に従つたことが多くある。

一、著者はまた武藏野に住する代々名主及びあらゆる舊家の子孫諸君、特志地方史愛好者諸君、社寺の神官住職諸君、其他古老各位に深甚の謝意を表さなければならぬ。

以上の諸君子は或は著者に其所藏する古文書古記録の類を貸與せられ、或は貸與の斡旋に盡力せられ、或は二三日に亘りて案内の勞をとられ、或は宿泊の便を與へられた。本書の成る一半は以上諸君子の好意による。

一、また謝すべき二人の人と三四の物あり。人とは故人齋藤真指及び安部立郎君で、物とは武藏野古地誌である。

一、真指は青梅町の神官である。明治の初年西多摩郡内の古文書を採訪し自ら其影寫を作り、又同郡内郷村誌をも著した。安部君は川越市の人である。大正の初年入間郡誌を著し、三芳野名勝圖會、川越素麵等の

古地誌を活刷刊行した。又川越近代史料の一部をも編次して置いた。著者は此兩人の遺業を基礎とし、從來未知の史料を發見し得たことも少くない。

一、武藏野の歴史地理を記載せる古書少なからず。中に就き新編武藏風土記稿、武藏名勝圖會等は其尤なるものである。

一、新編武藏風土記稿は徳川幕府官撰の書である。文化文政の際或は吏を地方に派し、或は村々より地誌書上を差出させて編纂したるものである。武藏國地誌にては最も大部にして最も體裁の整つたものである。著者は最も多く此書の恩恵を被つた。本書には略して單に此書を新編風土記稿と呼ぶ。

一、武藏名勝圖會は右新編風土記稿編者の一人なりし植田孟縉の著である。孟縉は八王子千人隊の人である。文政の初年此書を著した。孟縉

は當時に於ける歴史地理學者の一人であつただけに、此書も好著たるを失はない。殊に其自筆稿本に古文書を縮少模寫したるは多とすべきである。著者はこの書の恵に浴したことも頗る大である。今は假りに略して此書を單に名勝圖會と呼ぶ。

一、此外齋藤鶴磯の武藏野話、大橋方長の武藏演路や、八王子、青梅、川越、其他各地の特殊地誌類、總て著者の參考したる書籍は數十百種に及ぶ。何れも、其著者の靈に感謝の意を表する。

一、以上の諸書は何れも立派なものである。然れども何れも若干づゝの間違ひを免れない。一例を新編武藏風土記稿に取れば、この書の編者は必ずしも一々村々を巡回して實地調査をしたわけではない。地方の名主どもが差出した地誌書上を敢て研究もせず其儘採録せる場合が往々にしてある。其爲更に一考を要する様なことが少くない。ま

た此書の編者は入間郡堀の内村と山口村との地頭を混同し、同郡中神と多摩郡中神とを混同する如き間違も往々にしてやつて居る。

一、殊に金石文字に至りては右風土記稿のみならず、殆ど總ての古書が甚だ多くの間違ひをやつて居る。蓋し金石文字は多くは倉卒の際寫し來るものであるから、自然知らず、誤謬に陥つたのであらう。

一、以上の如くであるが故に、著者は出來るだけ多く根本の資料に據ることにした。金石文は殆ど全部實物を見ることにした。古文書の如きも出來るだけ多く實物に接することを努めた。又出來る限りは古文書も金石文も實物に當りて印刷の校正をすることゝした。

一、著者は今古書のアラ捜しをした。然りと雖、著者が如上古書の恩恵に浴せるや實に多大である。こゝに其アラを捜したる所以のものは、仁に當りては師に譲らずといへる古言に従へるまでゝある。吾人の先

覺の士は典籍未だ備はらず、交通の便未だ充分ならざる時代に當つて、よくもあれ程の仕事が出来たものである。地方史編纂の業は易の如くにして實は難中の難事である。地方史を絶対に間違なく書くといふことは或は人間業には出来ないかも知れない。思ふてこゝに至れば吾人の先覺の士は實にえらかつた。

一、地方史編纂の困難なる原因の一つは、其事の極めて煩瑣にして極めて多くの手数を要するのみならず、一人乃至二三人の力を以てしては到底あらゆる地方のあらゆる實情を知悉し難いといふ點にある。古地誌書の誤りの多いのも半ばは是に原因する。著者の如きは古人の事業を眺むると同時に、自らの事業を顧みて痛切に自責の念を増すばかりである。

一、江戸名所圖會は、親子孫三代數十年を費して出来たといふ。著者は固

よりさやう悠長なる恩榮を興へられない。されど稿を起して以來既に十餘年、この間古人と同じく幾多の煩雜と勞苦とを味つた。中頃屢々つくづく後悔したれども捨つるに捨てられず、遂に今日に至つた。

一、著者はまた本書の爲に随分無理なことをした。或時はこの爲に夜を徹した。或時は此爲に雪中の武藏野を彷徨した。或時は腹痛をこらへて登山し、其夜下痢十餘回、辛うじて一命を取り止めたこともある。或時は一千メートル餘の山頂で日に暮れられ、暗黒なる杉森の中にて途方に暮れたこともある。されど此種の旅行の爲に健康を得たことも少くはない。收支得失は只神様だけ、是を知る。自分にも分らない。

昭和三年五月十三日

著者 高橋源一郎 識

一、本書の校正及び漢文の訓點は、向後順一郎君外一兩君子に依頼した。
 一、又地圖挿畫の揮毫は木崎盛政、柳田謙吉、加藤謙一諸君子に依頼した。
 一、地圖は一括して卷尾に挿入した。其内東京近郊圖には針目をつけて置いた。讀者は本文記事と對照し、又旅行に携帶する便宜の爲、切り取つて別の袋の中に入れて置かるゝも結構である。又武藏武士分布略圖は主として本文五十五頁以下に、關東文明亂要地圖は同じく百十六頁以下に參照せられたい。
 一、著者は地圖には特殊の興味をもつて居る。故に出来るならば著色銅版七八度刷の立派な地圖を作りたいと思ふた。然れども色々の事情で思ふ存分の事が出来なかつた。將來出来るならば理想に近い地圖を作つて見たいと思ふ。

武藏野歴史地理 第一冊 目次

第一篇 總論

武藏野概説	一
武藏野の範圍	一
狹義の武藏野と廣義の武藏野	五
武藏野の歴史的概観	八
武藏野つ子	一三
武藏野の名物	一六
武藏野の風景	一七
本書記載の範圍	二五
武藏野文學十餘題	二七
平凡の景色……徳富蘇峰	二七

目次	二
聞え高きは武藏野	三〇
武藏野の道路	三一
武藏野の風	三二
武藏野の春の旅	三三
半日の閑遊	三五
武藏野の千種の花	三五
武藏野の夕立	三六
武藏野と伊勢のとよく野	三七
武藏野の草の枕	三八
郁芳門院侍良住武藏野事	三九
郁芳門院侍武藏野讀法花事	四〇
武藏野を詠める詩歌一束	四三
莊園組織	四六

目次	三
序説	四六
所謂莊園の意義	四七
武家支配の莊園	四九
葛西御廚の一例	五二
莊園組織の廢滅	五三
武藏七黨武士	五五
七黨武士の興起	五五
所謂七黨武士の分布	五八
七黨武士の子孫	六四
武藏武士の生活	六六
武藏武士の性格	七〇
附武藏武士の性格を顯せる一例	七八
都人の記せる一武藏人	八〇

武藏野遊歴或は研究の古人

..... 四

王朝時代の武藏野旅行者..... 八一

鎌倉南北朝時代の旅行者..... 八四

漆桶萬里..... 八五

道興准后..... 八七

堯惠法印..... 九〇

心敬宗祇、宗長..... 九二

十方庵主釋敬順と村尾正靖..... 九三

武藏野の古事研究の諸家——松平定常——齋藤鶴磯——古河古

松軒——齋藤幸雄一家..... 九七

武藏野の文書記録保存の恩人..... 一〇二

新編武藏風土記稿編纂の事業..... 一〇五

第一篇 東京北郊——北豊島郡地方

..... 一〇九

北豊島郡略説

..... 一〇九

徳川時代以前の豊島郡..... 一〇九

徳川時代の北豊島郡..... 一一三

瀧野川町

..... 一一五

平塚城址と豊島氏

..... 一一六

平塚城の合戦..... 一一八

中里、上中里部落..... 一二二

平塚神社の傳説..... 一二五

平塚神社の信すべき由緒附山川城管と朽木植綱..... 一二八

上中里城官寺と城官逆修の碑..... 一三二

城官寺檀家醫官多紀氏と其墓碑..... 一三四

西ヶ原部落..... 一三八

西ヶ原御殿山..... 一四〇

中里兔御用屋敷……………一四四

西ヶ原無量寺……………一四七

西ヶ原貝塚……………一四九

西ヶ原昌林寺……………一五二

板碑の話……………一五三

西ヶ原一里塚一名二本榎……………一五七

一里塚の話……………一六一

舊瀧野川村と瀧野川氏及び野間氏……………一六六

瀧野川遊覽地と紅葉……………一七〇

紅葉寺即金剛寺……………一七三

瀧野川正受院と近藤重藏石像……………一七四

瀧野川反射爐……………一八一

瀧野川火薬製造所今の板橋火薬製造所……………一八四

王子町……………一八六

王子飛鳥山……………一八七

飛鳥山名稱の由來と櫻植付の由來……………一八七

飛鳥山繁昌と將軍御成……………一九〇

冷泉爲久の詠に入る……………一九三

櫻の補植……………一九五

附飛鳥山の土器投并海老屋扇や片山賢……………一九七

王子権現社……………一九九

王子権現社の祭禮……………二〇三

王子金輪寺……………二〇八

王子稻荷……………二一二

付装束榎……………鈴木孫兵衛……………二一三

王子名主瀧……………二一四

徳川時代の王子村井王子十八講……………二一六

十條……………二一九

王子十條の貝塚古墳……………二二一

昔の十條田野……………二二三

豊島清光寺……………二二四

豊島西福寺と江戸近郊六阿彌陀……………二二六

附六阿彌陀姫の噂のすて處……………志賀忍……………二二八

豊島清光と其子孫……………二二九

足利時代以後の豊島氏……………二三二

豊島の板碑と豊島驛家……………二三五

近世の豊島村……………二三七

梶原と梶原氏、梶原塚……………二三九

王子町の諸工場——印刷局抄紙部——王子製紙會社——關東酸……………

板橋町

曹株式會社……………二四二

板橋と板橋氏……………二四五

所謂板橋城と板橋原……………二四七

徳川家光の板橋原狩獵……………二四九

下板橋宿……………二五一

下板橋の傳馬……………二五三

農村としての下板橋……………二五七

下板橋宿の寺社——東光寺——乘蓮寺——氷川神社……………二六一

根村と其寺社——智清寺——日曜寺——氷川神社……………二六四

縁切榎と近藤氏抱へ屋敷……………二六九

近藤勇、土方歳三の碑……………二七三

宇喜田秀家の墓碑と子孫……………二七四

金井窪と中丸……………二七八

上板橋町……………二八〇

 舊上板橋……………二八〇

 上板橋の社寺—天祖神社—氷川神社—安養院—長命寺……………二八三

長崎町……………二八六

 舊長崎部落……………二八六

 長崎椎名町と鼠山……………二八八

 雜司谷感應寺……………二九一

○練馬村……………二九七

 昔の練馬……………二九七

 矢野山城址舊記……………三〇〇

 矢野山城址と豊島園……………三〇三

 練馬屋敷山……………三〇六

谷戸部落と古板碑……………三〇七

谷戸部落の産業……………三〇九

 上練馬の寺社—愛染院—鎮守若宮八幡—壽福寺—圓光院……………三一

 下練馬の社寺—氷川神社—金乘院—圓明院、莊嚴寺、光傳寺……………三一三

 下練馬宿と練馬御殿……………三一六

 練馬大根と其起源……………三一七

 附練馬大根賣の笑話……………三二一

 練馬澤庵漬……………三二一

 上下兩練馬村高と戸口の増加……………三二三

 下土支田井下土支田後安……………三二五

中新井村……………三二七

 中新井……………三二八

 板倉勝重……………三三〇

中新井の社寺——正覺院——氷川社——辨財天……………三三一

中部落と南藏院……………三三三

千川用水と新櫻名所……………三三五

石神井村……………三三六

昔の石神井村……………三三六

石神井城址……………三四〇

石神井合戦……………三四四

上石神井三寶寺附禪定院……………三四六

徳川家光石神井野猪狩……………三四九

信忠隊の三寶寺滞在……………三五二

下石神井道場寺……………三五四

三寶寺池と周囲の諸社……………三五六

所謂石神……………三五八

谷原部落……………三六〇

谷原長命寺と増島氏……………三六二

田中部落……………三六六

田中福德の板碑と福德異年號……………三六七

關と竹下新田……………三七一

石神井川論……………三七四

川の効用……………三七四

石神井川の流路と河岸の産米……………三七八

石神井川と村落生成の關係……………三七九

石神井川と近世工業……………三八二

大泉村……………三八六

大泉村の成立……………三八六

上土支田と小樽……………三八七

小樽妙福寺と其御會式

三八九

橋戸

三九二

岩淵町

三九四

所謂岩淵五箇村

三九四

○ 稻付城址

三九五

静勝寺縁起

三九八

○ 稻付城は扇谷上杉氏の遺跡

四〇〇

○ 稻付地方及静勝寺と太田氏との關係

四〇一

静勝寺太田道灌木像

四〇三

附 君太祖道灌公眞容檀背記

四〇七

道灌像中の最古物

四一〇

其他稻付の諸寺

四一一

徳川時代の稻付部落

四一二

赤羽と赤羽八幡

四一三

岩淵宿

四一五

岩淵正光寺

四一七

荒川の渡

四一九

下と神谷

四二一

袋部落

四二三

志村

四二五

舊志村

四二五

志村城址と城山権現

四二八

志村一里塚

四三〇

志村鳥見屋敷と志村原將軍放鷹

四三二

志村延命寺と吉宗將軍御茶屋跡

四三四

清水坂下大善寺

四三七

小豆澤……………四三八

小豆澤貝塚と龍福寺板碑……………四四〇

本蓮沼……………四四二

志村前野と中臺及び前野名物……………四四四

西臺と其寺院及び名物……………四四七

蓮根……………四五〇

赤塚村……………四五一

赤塚氏……………四五二

山城鹿王院と赤塚郷との關係……………四五四

赤塚城址……………四五六

赤塚千葉氏……………四五八

千葉氏菩提所松月院……………四六〇

赤塚大堂と曆應の古鐘……………四六二

曆應鐘銘撰者中岩圓月……………四六六

赤塚諏訪神社と其祭禮……………四六八

赤塚石成……………四七〇

徳川時代の舊赤塚村と成増……………四七一

勤王僧胤康……………四七三

徳丸……………四七五

徳丸原訓練場……………四七七

高嶋秋帆の徳丸原訓練……………四八四

挿入繪圖及び地圖

武藏野附近略圖……………三

板碑の圖……………一五四

大正六七年頃の二本榎……………一五八

目次

一八

江戸名所百景王子瀧の川	一七五
正受院及瀧野川文庫附近圖	一七九
百餘年前の板橋驛	二五八、二五九
百餘年前の乗蓮寺	二六三
石神井城附近圖	三四二、三四三
百餘年前の長命寺圖	三六三
太田道灌木像	四〇四
百餘年前の大堂圖	四六五
徳丸原附近圖	四七八
徳丸原演武之圖	四八六
東京北郊圖	卷尾
武藏武士分布略圖	卷尾
關東文明亂要地圖	卷尾

武藏野歴史地理 第一册

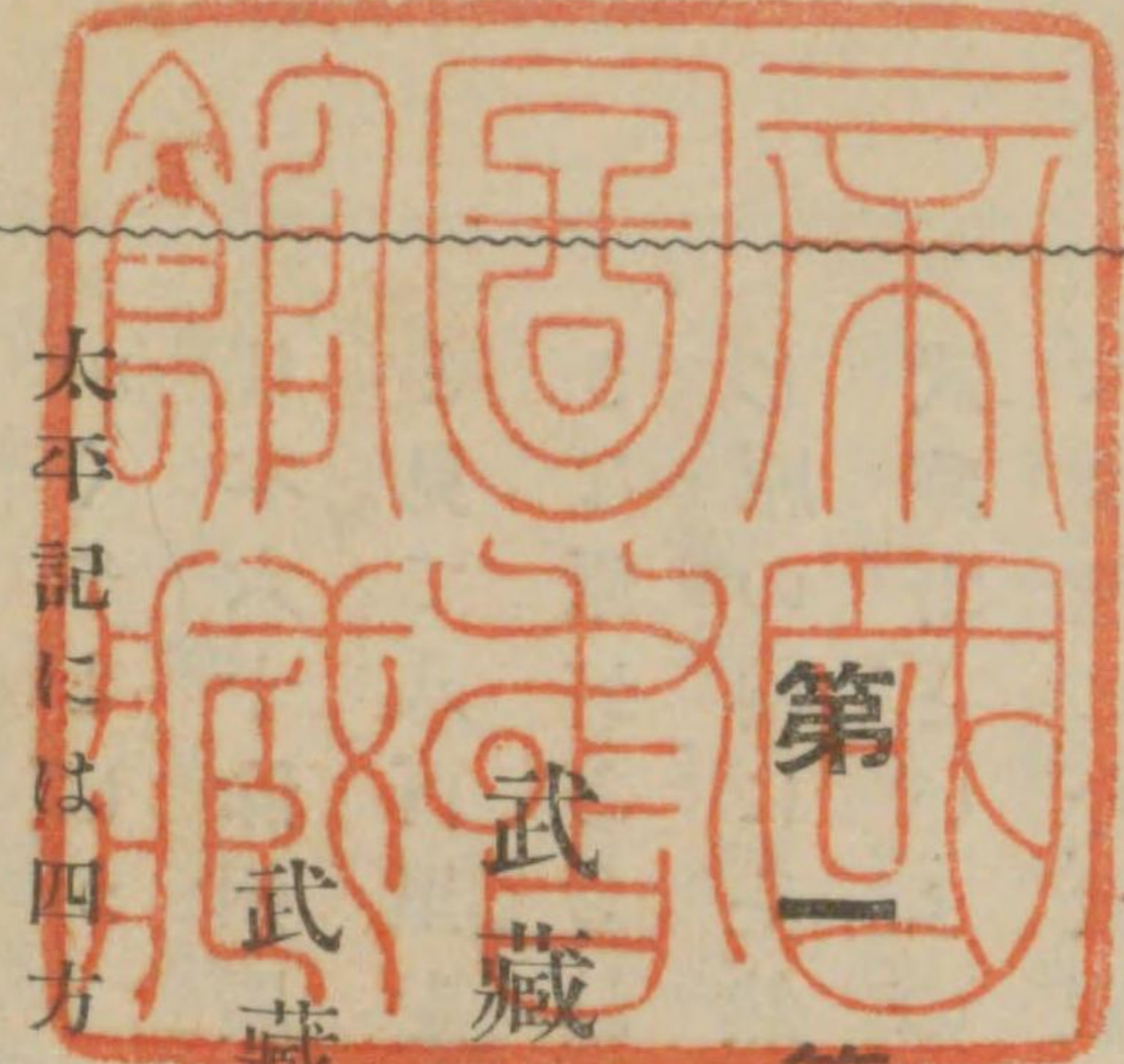
高橋源一郎著

第一篇 總論

武藏野概説

武藏野の範圍

太平記には四方八百里に餘れる武藏野と書いてある。又新古今和歌集には



武藏野概説—武藏野の範圍

左衛門督通光

武藏野や行けども秋のはてぞなきいかなる風の末に吹くらむ
といふ歌がある。廣いかな、武藏野の景、茫茫無邊際、蒙古シベリヤの原も
かくやとばかり思はれる。

日本六十餘州廣しと雖、長さは五百里、幅は七十里に過ぎない。六町一里
と見て、八百里を今の里數に直しても百三十里に餘る。日本にそんな大
きな原があられるだらうか。いかなる風の末に吹くらむなどいへば、同
じ原の内に全然氣候の違ふ處がある様にも想像せられる。然らば一體、
武藏野といふのは、何處から何處まで指すのであらうか。是に對する答
へは、現に今、武藏野に生れて、武藏野に生活してゐる者でも、其説が甚だ
まち／＼であらう。

昔の本にしてもさうである。徳川時代の初めなる林羅山の丙辰紀行に
は、此國の稻毛、葛西、越谷、岩筑、河越、鴻巣、忍なども皆むさし野の内にて侍

野を「武藏野の東野中の程」と記してある。是等に由つて之を觀れ

武藏野は川越以南は勿論、以北以東、中山道左右の原野より、北は上野
國境に及び、西は秩父の山の根まで廣がつて居つたこと明かである。

さればといつて、北國紀行には、今の東京上野公園邊忍岡あたりを「武藏
野の東の界」と記してあるから、今の南北埼玉、南足立郡邊の田野、岩槻、越
谷、葛西邊は武藏野とは呼ばなかつたが如くである。

狹義の武藏野と廣義の武藏野

かくの如く武藏野の範圍は殆ど一定して居らない。本來武藏野といふ
名は一の行政區劃をなして居つたものでも何でもなく、只茫然多くの
人に呼びなされて居つたのみであるから、劃然たる範圍境域といふも
のではないのである。故に地圖の上に其境界線を書くことは出來ない。第

一、最も廣い意味に解釋すれば、武藏一國中苟くも平地であれば、皆是を武藏野といふことが出来る。丙辰紀行、名所方角抄などは此の意味である。第二、是を狹義に解釋すれば、武藏國の内、山地と丘陵地と水田地方とを除きたる、洪積層赤土の原野總てを武藏野といふことが出来る。北國紀行等の解は即ち是である。第三、更に一層狹義に解すれば、川越以南、府中までの間を限る原野といふことが出来る。北條五代記及び河越記等は是である。

文化年中に出來た遊囊贖記といふ本に、

武藏野は相模の境都築郡より上野の境賀美郡へつゞき、延袤二三十里、高平曠遠の總名と知べし。されど別て武藏野と稱するは、多摩、入間郡に跨ぎたる府中、川越の間を限るに似たり。

『前述第二、第三の兩意見を採つたので、最も正當な見解である。』

しかし、徳川時代に幕府で、武藏野、或は武藏野新田と呼んだのは、第三の最も狭き意味の方である。府中、川越間原野をば武藏野と呼び、其開墾田をば武藏野新田と稱した。されど、比企、兒玉の原野及び、葛西、埼玉地方の田野をば、決して武藏野とはいはなかつた。

此の最も狭き意味の武藏野は、武藏國內でも最も曠遠高平なる處で、徳川時代の初めまでは、草木蓊々、十里無人の荒野であつた。其地相も武藏國の他の部分とは著しく違つて居る。故に著者も此の最狹義の方を採つて、武藏野の範圍を限定することにす。即ち著者の所謂武藏野は、西は秩父、西多摩の連山を以て限り、南は多摩川を以て限り、北及び東は越邊川、入間川及び、荒川筋を以て境する高臺の地方である。

特に高臺と斷つたわけは、以上の山川を以て圍まれた地方でも、低平なる河岸の水田地方は武藏野の中に算入せないからである。大概田澤義

章の武藏野地名考に「西は秩父根、東は海、北は河越、南は向ヶ岡、都築の原にいたるとなむ」といへると、大同小異の地域である。また江戸名所圖會に「南は多摩川、北は荒川、東は隅田川、西は大嶽秩父根を限とし云々」といへるとは、殆ど全く同一地域である。齋藤鶴磯の武藏野話、石上宣續の卯花園漫録等に武藏野といへるも、殆ど同じ範圍である。郡を以て是をいへば、荏原、豊多摩、北豊島、北多摩、西多摩、入間、北足立の七郡に互る。中にも入間、北多摩が其大部分を占めて居る。廣さは四方大凡八里位に及ぶ。即ち太平記の二百數十分の一である。

武藏野の歴史的概観

我が日本本州は西より東に延び、途中で一廻轉して北に向つて居る。武藏野は丁度其の廻轉の處にある。西は脊梁山脈の麓より起り、東は直ちに海に接して居る。故に本州の外側を西より、或は南より、東北に赴かんとするには、どうしても武藏野を通過せなければならぬ。此意味に於て武藏野は交通上の要樞であつた。殊に上世には武藏國司の府廳は多摩川の沿岸、今の府中町にあり、官使往還の國道は今の上野邑樂郡館林邊より此野を貫き、府中町に達して居つたが故に、一層多くの旅人が此處を往來した。しかも曠遠無人の荒野であつたが故に、其の廣さと恐ろしさとは早く上方人士の間に喧傳せられた。

武家の世となつて日本の政治の中心が鎌倉に出來てからは、此の野は交通上益重要になつた。いはゞ近江湖東に比すべき地となつた。從來は主として廣い所、恐ろしい所、旅人の行仆れる所として有名であつたが、是からは日本全體の政局に關係する大小幾多の事件が此武藏野に捲き起つた。武藏野全體が近江湖東であるから、多摩川はとりもなほさず、

宇治川、勢多川である。入間川、越邊川はそれ〴〵野洲川、愛知川である。是等の多摩、入間、越邊等の川々の渡場は、古來幾多の好戰場となつた。元弘三年新田義貞が骰子トウシを打ち投げ、多摩川を渡つて以來、千軍萬馬が武藏野を奔馳し、屍山血河を築きたること、それ幾何ぞ。鎌倉街道の通る所、丘あれば其丘が戰場となり、川あれば其川が戰場となつた。關東の政局に於ては武藏野を取つたものは天下を取つたと同様である。故に鎌倉の足利氏が北方の敵と争ふ時には必ず武藏野に目をつけた。足利管領の初代基氏は武藏野の中心入間川宿に來て其生涯の大部分を送つた。自餘の關東管領もいざといふ場合は鎌倉を出で、武藏野府中宿に陣座した。或時は將を遣りて苦林にがはやし、入間川宿に陣し合戦の兵を募らせた。

鎌倉管領——公方と稱す——が鎌倉を棄て下總古河に移つてからは、武藏野は完全に上杉氏の所有となつた。以來古河足利氏の風は振はない。關

東は一時上杉氏の旗風に吹き靡かされた。上杉氏は野の北の端に河越城を築き、東の端に江戸城を築いて自國防衛の要塞とした。武藏野は江戸、河越を連ねて上杉氏の一派扇谷家の根據地となつた。續いて扇谷家と上州の上杉山内家と兩家の争ひは、殆ど全く武藏野争奪で始終した。上杉北條兩氏の争ひとても、武藏野争奪の爲に二十年を費した。兩上杉の争より通じて約四十年、此の間武藏野の此面彼面こゝもあゝもに太刀打ちの音、矢叫びの聲は幾度となく聞えた。武藏野を奪取した北條氏は破竹の勢を以て關東を席捲した。されど、此の後とても武藏野は決して安穩では無かつた。越後の荒武者上杉謙信も、甲州の頑強武田信玄も、自ら陣頭に立つて武藏野を踏みにじつた。嗚呼多事なりし武藏野よ。

徳川氏が幕府を江戸に開いてからは、武藏野は天下一般の習ひにつれ

て、最早干戈の聲は聞かなくなつたが、しかも將軍御膝下であるから、幕府では決して是を等閑には扱はなかつた。同じ江戸近くの野原でも、下總野は全部を舉げて牧場としたが、武藏野は荒蕪を開いて人民を植付け、計を立てた。中山道、甲州街道はいふに及ばず、青梅街道の様な立派な道路を幾つも開いた。川越には酒井、松平の如く昵近の臣を置き、其他の村々には二百石三百石の小旗本を土著させて、月々江戸に勤めさせた。江戸の窮民を移しては野の中央に財産平等の新村落を營ませた。八代將軍吉宗の時代に至つては、猫額大の地をも餘さじと、新田畑の開墾をさせた。昔々鎌倉時代の初め、順徳天皇の御代、建保三年六月、右大辨藤原定高と名乗る匿名の歌人は或歌合の會に、

武藏野の萩や薄やほりたてゝ瓜やなすびや植てもたばや月卿雲客
妬歌合
と詠んだ。萩や薄を掘棄てゝ瓜や茄子を植ゑてほしい、といふのだが、此

の願ひは正しく叶へられた。

* * * * *

明治大正昭和の今日では、武藏野は畏くも一天萬乗の大君の御膝下である。大東京市は延長また延長、日に月に野中に入り込んで、到る處に赤瓦の文化村が見える様になつた。或剽輕へうきんな狂歌師は江戸の時代に、
武藏野は民のかまどにたてつぶし軒より出でて軒に入る月
と詠んだ。其の當時は少しく大げさの様にも思はれたが、間もなく是が事實に現はれ來るであらう。

武藏野つ子

武藏野は曠遠無人の荒野であつたといふと雖、全然人家村落が無かつたわけではない。彼方此方の山裾、野縁べり、谷合等には時代相當の村があつ

た。是等の村に生れ、是等の村に育つた武藏野つ子で、史上に其名を馳せたものも少くない。朝鮮種の高麗福信は飯能まき在高麗村邊で育つた人なれど、早く京都に仕官し、京都で死んだ人だから暫く措く。所謂武藏七黨武士の中に聞えたる、村山黨、西黨、横山黨の武士は皆この野中、野縁べりの村々に生活して居つた。兒玉黨や、秩父氏の一族も多く此野に擴つて居つた。是等の武士は保元平治の兩役に西上し、京洛に其名を馳せて以來、或は宇治川に、或は一の谷、屋嶋、壇の浦に轉戦した。中にも村山黨の金子家忠は入間郡扇町屋近在の生れで、保元平治の亂に其の名を顯し、西黨の平山季重は八王子近郊の生れで、一の谷に其勇名を轟かした。義經の本妻某は河越の生れである。

南北朝時代に至つては、平一揆、南一揆、白旗一揆、八文字一揆などいふ武士どもが、山手の村々に住して、或は足利氏に、或は吉野朝廷に忠勤を

擢んでた。江戸氏、豊島氏は鎌倉時代より南北朝時代を通じて、最も多く史上に活躍して居る。

足利時代中期の扇谷上杉定正、其家臣太田道灌は主として此の野原を舞臺として活動した。同じく足利時代の末期なる大醫田代三喜も、小田原北條時代の最期に掉尾の勇を振つた中山勘解由家範も、此の野の生れである。

徳川時代の初めには、幕府麾下の士を多く此の野に土著せしめた。有名なる長坂血鎧九郎とか、横田尹松など、何れもこの野中の人となつた。島原役に勇名を馳せたる板倉重昌も、石谷貞清も、其後に行つた松平信綱も、皆この野中に知行や領地や郷貫をもつて居つた人である。明治維新の際には、多摩郡府中町近在の農家に生れた近藤勇、土方歳三の二人が、徳川幕府の爲に孤忠を擢んでた。最近まで三多摩勇士の名は政界一

種の恐れであつた。尙委しくは後節武藏武士の條下に述べる。

武藏野の名物

武藏野には名物がある。歴史的意味を離れて寧ろ文學的に昔からもてはやされて居る。第一、武藏野それ自ら、第二、玉川にさらす手づくり、第三、多摩の横山、第四、堀兼の井、第五、入間の郡三芳野の里、第六、野火止塚、第七、霞の關、第八、狭山及び狭山池、第九、迹水、其外まだある。

武藏野それ自らのことは別に述べる。第二、第三、玉川にさらす手づくりと多摩の横山とは、日本最古の歌集萬葉集に出て居る。しかも手づくりの本家は三箇處ある。荏原郡調布村、北多摩郡調布町、西多摩郡調布村、何れも自ら本家と稱して居る。横山には餘り議論はないが、確かな場所は分らない。第四、堀兼の井は平安朝時代の清少納言の枕の草紙以來、最も多くもてはやされて居る。されど是も真正銘の古井は見當らぬ。第五、三芳野の里は同じ平安朝時代の伊勢物語にある。是も本家が二三ある。第六以下それごとく、歌人文學者の間の語り草となつて居る。何れ委しいことは各論に入つて説明する。

武藏野の風景

前述の如く上世の武藏野は大荒野であつた。されど、交通上の要樞であつたが故に、早くから有名になつて居つた。其の廣いのと、旅人が困難するのとは、言ひ傳へ聞き傳へられて、奈良平安の都の人士の間に名高くあつた。廣いといへば武藏野、旅行に困るといへば、武藏野を連想する様になつた。知るも知らぬも、都の歌人は喜んで武藏野を歌の材料にした。既に萬葉集にも、武藏野を詠じた歌は數多く出て居る。其後古今集以下

代々の歌集にも相當に多く出て居る。こゝには比較的人口に慣れて居るものを三四掲載する。

五十首の歌奉りけるに、野徑月

攝政太政大臣良經

行くするは空もひとつの武藏野に草の原より出づる月かげ新古今集

建保三年内裏の歌合に

大納言通方

むさし野は月の入るべき嶺もなし尾花が未にかゝるしら雲續古今集

法印能海

出づるにも入るにも同じ武藏野の尾花を分くる秋の夜の月玉葉集

名所の歌よみ侍りけるに

後鳥羽院下野

あふ人にとへどかはらぬ同じ名の幾日になりぬ武藏野の原續古今集

從二位家隆

小男鹿さしかの夜半の草ぶし明けぬれどかへる山なき武藏野の原新拾遺集

平貞俊

むさしのや里とをければ鶏の音を草の枕にきくよはもなし續現葉集

題しらす

よみひとしらす

行くするは露だにおかじ夕立の雲にあまれるむさしのの原新後拾遺集

以上何れも武藏野の月と廣いといふことを題材としたものである。

吾人は武藏野を詠じたる古歌をあさつて百首位を得るのは容易である。しかも其の大半は「月の入るべき嶺もなし」とか「夕立の雲に餘れる」とかいふ種類のもののみである。しかも武藏野の月と廣いといふことは昔より有名であつた。されど武藏野は決して月と廣いばかりが能ではない。春夏秋冬、朝に夕に、種々の景象と特徴とがある。殊に檜櫓の林と陽炎とは近代の人々に賞美せられた。左は明治時代の一文士の武藏野の林を賞したる一節である。

昔の武藏野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつても宜い。則ち木は重に檜の類で冬は悉く落葉し、春は滴る計りの新緑萌え出づる。其變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に綠蔭に紅葉に、様々の光景を呈する。其妙は一寸西國地方又東北の者には解し兼ねるのである。國木田獨歩作武藏野

又次ぎは武藏野の陽炎を賞したる徳川初代の一碩儒の作である。

武野、煙草

林 羅 山

野草連テニ天煙尙凝ル

眺中逸興又堪タリズルニ乘

武州到處風光好。非霧非花氣

似タリニ蒸。羅山詩集

* * * * *

左の一二首は最も著者の意を得たるものである。

武藏野

加 茂 季 鷹

武藏野に山のはなしとみし人にみせばや雪の秩父かひがね江戸名所集

遠山霞

加 藤 枝 直

武藏野をふりさけみれば秩父嶺に春日かげろひ霞たなびくあづまうた

* * * * *

著者は思ふ。武藏野の美景は野の末を取り捲く連山に極まる。月もよい、薄もよい、檜の林もよい、陽炎もよい。檜の林に降りそぐ時雨の音もよい。されど、其の薄や、檜林や、陽炎の彼方に蜿蜒する連山が無かつたならば、武藏野の景は或は蕭條たるものとなるであらう。月や、薄や、檜林や、是等は或は人を悲みに導くであらう。單に是等のものばかりであつたならば、秋雨のそぼふる日、野分風の吹き荒む夕など、感傷的詩人

は其悲みに堪へないであらう。しかし武藏野には西及び北を取り捲く連山あるが故に、其景は雄大である。壯嚴である。崇高である。薄も、萩も、檜櫛林も、此の連山を配し得て、千萬の軍兵の屯せるが如くも見ゆる。著者は茫茫たる武藏野の旗薄の彼方に蜿蜒起伏する連嶺を眺め得て、たまらなく愉快である。若夫れ朝な夕なに變化する山の色彩に至つては、筆にも口にも及ばれない。左に著者の古日記の一節を掲載する。是は大正四年中央線鐵道立川驛より武藏野の直中、砂川村、村山郷邊に一二日淹遊し、やがて秩父山中に入らんとしたる時のもので、十二月末つかたの事である。

午前九時に垂んとする時砂川村砂川君の樂水園を發す。是より途村山郷殿谷戸とのがやとに至るまでは、昨日曾遊の處なるを以て、ひたすらに歩を

急げり。然れども左方に螺鬢をあらはす秩父、甲斐が嶺、富士、阿夫利の壯麗、美觀に對しては、一昨日も昨日も充分賞美したるなれども、尙賞美し足らざるの感あり。我もし志を得ずんば、此原野の一隅に其の居を營み、百歩の畑を耕し、連山の美景に我が心を融合し、混化し、百年千年長く生きんの感想又しても起り來りぬ。武藏野の大景は枯尾花にもあらず、旗すゝきにもあらず。實に西北に蜿蜒起伏する連山にあり。古人武藏野を詠する、只其廣漠たるを見て、此連山の美景を知らず。是れ都人士が題詠によりて此の武藏野を弄びたるを以てなり。かゝる事など思ひつゝ、更に西方を眺むれば、秋川の谷にやあらむ、山の峽より白き煙の細く立ち上るあり。是より南北に互れる連山の奔馬の姿して逃げんとするが如きものあり。是を追はんとするが如きものあり。獅子一たび怒りて咆哮するが如きあり。世の中の騒ぎをよ

そに眠るが如きあり。是等の連山を踏まへて東海の第一峰芙蓉の嶺は其頭に白雪を載せて、ほしいまゝに其の秀麗の姿を天空に廣げたり。或峰は紫の色をなし、或谷は見るもまばゆき紅の色を呈し、或頂きは銀の蓮華を廣げたるが如く、或山峽は輕羅をまとへるが如く、千狀萬態、見れども盡きず、賞すれども限りなし。あゝ我、武藏野の山を眺めて死ななかな。

* * * * *

讀者もし著者の此の言を疑はゞ、武藏野の直中、狭山丘陵の邊に至り、西方秋川谿谷と關東山脈の連山とを併せ見よ。山好きにあらざれば山を知らず、野好きにあらざれば野を知らず。著者は敢へて山好き野好きの人士の共鳴を信じて疑はず。再びいふ。武藏野の美景は野の末を取り捲く連山に極まる。

本書記載の範圍

著者は武藏野の村々の八九分を歩き盡した。本書は其の行遊の記念碑である。以下次ぎに著者の足を印したる村々の記述を進めて行く。本來ならば、前に限定したる如く、西、山の麓より、東、南、北三方は武藏野高臺原野の盡くる處を以て、本書記載の限りとすべきである。しかし實際に於てはさうも行かない。たとへば北豊島郡平塚、王子に豊島氏の跡を尋ねては、どうしても豊島清光寺を逸し去ることが出来ない。又北多摩郡府中町を論じては、分倍河原の古戰場を閑却することは不可能である。それから、多摩河南の山丘は全然武藏野の範圍外であるけれども、登つて見て武藏野の大觀を得るには極めて便利であり、史蹟も割合に多くある。武藏野遊觀人士の第一に行くべき場所であるから、併せて記載

する。又西方山丘の間の村々は割合に早くから文明も開け、傳ふべき事蹟も多く、平野の村々とは何かにつけ、切つても切れない交渉があるから、自然訪問調査し、論述の歩を進めざるを得なかつた。且又、著者は考へる。平安王朝の都人は嵯峨や御室の山中より、はては宇治郡笠取山の奥までも入込んで其居を營んだ。東京の人士も自然この山に親む時が來るであらう。この考へより隨分骨を折つて山村を歩き廻つた。

更に一言すべきことがある。東京も武藏野の内である。理論上本書の内に記載すべき筈である。されど東京は三百年來特殊の發達をした處で、最早武藏野の東京ではなく、日本の東京、世界の東京である。歴史上の遺跡も頗る多く、又其變遷も甚だ大である。到底武藏野の農村と同一に扱ふことは出來ない。加ふるに、本書は前述の如く、著者が膝栗毛に鞭ちた

る跡の記載である。最初より其目的は彼にあつて、此にはあらぬ。故に東京市内と市内に准すべき町村とは一切記載せないことにした。

武藏野文學十餘題

平凡の景色

徳 富 蘇 峰

日本では勝地と言へば、概ね風變りの場所だ。山では妙義とか、溪では耶馬溪とか、瀧では那智とか、川では富士川とか。此れも勿論可なりだ。奇峰、怪嶺、急湍、激流、決して人の興味を唆らぬこととはない。

併し平凡なる風景の中にも、佳趣がある。予は何れかと云へば、人の餘

りに顧みない平凡の風景を愛する。平凡の景色中にて、取り分け面白きは、野の景色だ。野の景色中にも、武藏野の如きは、其の重なる一であらう。

予は去る十月廿二日^{○大正}十一^年の日曜に、家族と與に、無上の日本晴れを好機として、終日武藏野を遊び暮らした。午前九時青山から代々木、淀橋、中野、杉並、田無、所澤、豊岡、飯能、高麗、川越、大和田、野火止、白子、練馬、板橋、巢鴨を経て、午後六時に中央停車場に著した。其の里程は、恐らくは一百哩に垂んとしたであらう。

武藏野は往古、朝鮮人の移住地であつた。此れは武藏野に限らず、關東一般概ね然りであつたが、武藏野は特に然りだ。續日本紀に曰はく、

靈龜二年、以^テ駿河、甲斐、相模、上總、下總、常陸、下野七國、高麗人千七百九十九人、遷^シ于武藏國、置^ク高麗郡^ヲ焉。

と。今や高麗郡は明治二十九年以來、入間郡に合併せられたが、然も高麗村もあれば、高麗川もある。而して明治二十九年北足立郡に合併したる新座郡の如きも、新羅郡の轉訛で、白子村も新羅村の轉訛であると云ふ説がある。乃ち、

天平寶字二年八月、歸化新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人、移^ス武藏國、閑地^ニ。於是始置^ク新羅郡^ヲ焉。

とあれば、其の由來は知る可しだ。

三代將軍の時代、板橋で鹿狩をし、五百餘頭を獲たと云へば、奈良朝の古、武藏野は熊の住家であるは、勿論だ。

武藏野の風光は、實に何とも名狀し難い。其の淡々として、何等人を驚かす奇抜の光景無き所に於て、眞に野趣がある。然も此の野趣に畫龍點睛の妙味を添ふるは、隨所に富士山を望むことだ。

今や武藏野と云ひつゝも、大道は縦横に通じ、鶏犬の聲は、相ひ聞ゆ。所謂る曠野の面影は、只史情によりて湧き出づるのみだ。然も今日の武藏野を見て、尙ほ一千年前の武藏野が、心眼に動き出づ。蘇峰隨筆

聞え高きは武藏野

抑當國は王城に遠く、天離る鄙あまさかの境勿論なりと云へ共、古より詩客歌人の眺に應じて古き名所多き中にも、殊更に聞え高きは武藏野なる

べし。舊記に四方八百里に餘れりと書るも、坂東道に取ては、さのみ筆のすさびとも云難からんか。時移り世變じて田に鋤き、畑に墾き、民家林藪に沿革して今は十分が一を残せり。關八州古戦録

武藏野の道路

國木田獨步

武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば、必ず其處に見るべく、聞くべく、感すべき獲物がある。武藏野の美はたゞ其縦横に通ずる數千條の路を當あてもなく歩くことに由て始めて獲られる。春夏、秋冬、朝、晝、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此路をぶらぶら歩て思ひつき次第に右し左すれば、隨所に吾等を満足さするものがある。これが實に又た、武藏野第一の特色だらうと自分はしみじみ感じて居る。武

藏野を除て日本に此様な處が何處にあるか。北海道の原野には無論の事、奈須野にもない。其外何處にあるか。林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る處が何處にあるか。實に武藏野に斯る特殊の路のあるのは此の故である。武藏野

武藏野の風

古河 古松 軒

保谷村と云は新座郡のうちにて、新田所は玉郡にあり。此地の土人の云、武藏野の原、新田にならざる以前は、小草ばかりの廣き原にて樹木なかりし故、遙なる所も一目に見へ渡り、新座郡の内より甲州街道の村々へ行にも徑道に行し故、近く、今は曲道となりて遠くなりしとの事也。長壽せし者は近き年までも存在して物語をせしと云傳へ也。又云、草刈などに行にも、杭を打立てそれに籠を結び附置ざれば、風に吹

飛され、一里も二里も行事にて、至て風の強き時は其身も吹倒されて起る事もならず、ころりくと五丁も十町も吹ころばされしよし。新田所となりし初は、家のまわりに芝塘築て住し事にて、土手なき家は地を深く掘て其中に伏屋を造り家居をせしといふ。左もせざれば何もかも風に吹取られし事にて、今の如きの姿はなかりしよし。所々に昔の芝塘の形残りしもありき。さも有りしにや。伏屋とは柱なき家造にて人の伏したる形に似たる茅屋を云。四神地名録

武藏野の春の旅

弓屋 倭文子

いつしかも田舎だつ家居の、おろそけなる高垣もめづらしう、武藏野は董の色こきところなりけり。見はやしつゝ行くに、おのがじしひと夜寝ぬべしなどはいへど、こゝは過ぎて大井井村、川越近在○今入間郡大てふ驛うまやにや

どりぬ。あさけの駒の鈴の音してゆくは、我も勇むこゝちせり。昔おほやけよりたまひたるを鳴しつらんがうつりて、さらぬ馬どもの頭に、ちひさくてかくるにやと、しらぬ事をいひ定むるもをかし。空少しあかりたるほど、春の野の朝露に、淺緑なる梢どものほのくくと霞みわたれるは、たとふべきものなんなき。人目なげなる垣ほの櫻の、わび顔にうつろふが、をかしうてまもり居たるを、あるじとおぼしくて、手な觸れそといふべきけしきしてあめるを、をこになりて、

惜むともたゝんあらしはいかにせん散る花毎に手をやさへましとおぼゆるも、いつの程にか路ゆき人の心にはなりにけん。入間の川を渡りゆくに、山寺の鐘の音きこえて、あはれなる雲のまよひに、いかに遅れけん、ほのかに聞ゆる雁がねを人々あはれがる。

わかれには田の面の雁もわびぬめり心よりにしみよし野のさと

伊香保の道ゆきぶり。倭文女十八歳の作。倭文女は縣門の才媛、二十歳にて逝く。

半日の閑遊

天野信景

半日の閑遊も世のちりをはらふ心地ぞし侍る。折から富士雪はれて、しろくくとみえけるこそ、今少し生のぶる様におもはれ侍りて、

むさしのや尾花が末を踏わけてゆきにまよひぬ富士の遠山鹽尻

武藏野の千種の花

中川久盛夫人

武藏野の千種の花も見まほしう覺えて、秋の半の比ほひ、まだ有明の月も残れるに、露とともに起出て行きけり。秋のはてなしと聞きしもことわりしるく、はるくと野を分け行けば、桔梗、かるかや、女郎花、りうたん、はな薄、名もしらぬ草までも、花ならぬはなかりければ、面白さ

いはんかたなし。人々

むつまじき花のにはひを身にふれて分くるはうれし武藏野の原
秋待ちて花にとめ行く武藏野はかぎりなきしもうれしかりけり
語りなば我もかうとやいひなましはなをみなへし華のいろく

寛永十六年紀行、伊香保記。中川久盛は豊後岡城主。夫人は松平定勝の女、徳川家
康の姪傳通院御方の孫である。慶長十三年家康の命によりて結婚。

武藏野の夕立

詞これは都に住居いたす藪醫者でござる。都には上手の醫者が數多
ござるによつて、身共がやうなる下手な醫者は、はやりませぬ程に、此
度思ひ立ち、東の方へ稼ぎに參らうと存ずる。道行まづ急いで參らう。
やれく、久々住みなれた故郷をふり捨て、この如くに東へ下るは、何

とも氣の毒な事でござる。さりながら、又追付仕合を致して上らうと
存ずる。やあ參るほどに、これは廣い野へ出た。定めてこれは聞き及う
だ武藏野と云ふがこれであらう。扱もく、廣い事かな。やあ、今迄好い
天氣であつたが、俄に暗うなつた。夕立がすると見えた。この野で夕立
に遇うたら、何ともなるまい。はあ、どこやら雷の鳴る音もする。されば
こそ夕立がして來た。雷も頻に鳴るわ。落ちはせまいか。桑原くく

狂言針立雷

武藏野と伊勢のとよく野

とよく野のすゑはるくとかぎりなく過行に、音に聞ゆるむさし野
とても、是には過侍らでやなど詠めやり侍るに、兩國の名所もとりど
りに思ひなされて、例の又狂言もおもひつゞけ侍る。

武藏野に伊勢のとよくのくらぶればなをこの國ぞすゑはるかな
る室町殿伊勢參宮記

武藏野の草の枕

宗 久

むさしのはてなき道に行くれて、その夜は道づれの僧などあまた
ありしも、みなかりそめの草の枕をむすびてとゞまり侍りしほどに、
此野はむかしもぬす人ありてぞ、けふはなやきを」ともよまれけると
きゝをきしかど、さまでやはとおもひしに、苔の衣をさへひきてかへ
りし白波のあらかりしなごりに、いとゞ旅の床もものうくこそ侍り
しか。

厭はずはかゝらましやは露の身の憂にも消ぬ武藏のの原

觀應年中の紀行、都のつと。本節は甲州より常陸に至る道中のことである。

郁芳門院侍良住武藏野事

鴨 長 明

西行法師東ノ方修行シケル時、月ノ夜武藏野ヲ過ル事アリケリ。比ハ
八月十日アマリナレバ、晝ノヤウナルニ、花ノ色々露ヲ帯、虫ノ聲々風
ニタグヒツ、心モ及バズハル、ト中ニ經ノ聲キコユ。イトアヤシ
ク聞ニ驚カレテ、聲ヲ尋テ行テ見レバ、僅ニ一間バカリナル菴アリ。菴
女郎花ヲカコヒニシテ、薄カルカヤ萩ナドヲ取マゼツ、上ニハフケ
リ。其中ニ年タケタルガ□聲ニテ法華經ヲツ、リ讀、イトメヅラカニ
覺ヘテ、イカナル人ノカクテハト問ケレバ、「我ハ昔郁芳門院ノ侍ノ長
ナリシガ、隠レサセオハシマセシ後、臆テサマヲカヘテ、人ニシラレザ
ラム所ニスマン心ザシ深クテ、イツチトモナク徘徊アリキ侍シ程ニ、
サルベキニヤアリケム、此花ノ色々ヲヨスガニテ野中ニトマリ住テ、

ヲノヅカラ多ノ年ヲ送り、モトヨリ秋ノ草ヲ心ニソメ侍シ身ナレバ、
 花ナキ時ハ其跡ヲシノビ、此比ハ色ニ心ヲナグサメツ、愁シキ事侍
 ラズト云。是ヲ聞ニアリガタク哀ニ覺ヘテ涙ヲ落シテサマ〜語フ。
 サテモイカニシテカ月日ヲ送給ト問ヘバ、オボロゲニテ里ナドニ罷
 出事モナシ。ヲノヅカラ人ノ哀レミヲ待テ侍レバ、四五日ムナシキ時
 モアリ、大方ハ此花ノ中ニテ烟立ン事モ本意ナラヌヤウニ覺ヘテ常
 ニハ朝夕ノサマニハアラズトゾ語リケル。イカニ心スミケルゾウラ
 ヤマシクナム。發心集第六

郁芳門院侍武藏野讀法花事 西行法師

サイツゴロ東國修行ノ時、ムサシノヲスギ侍リシニ、四方ノ草ノミシ
 グリテ人モスマズ、草花色々ニサキミダレテ、サナガラモ、ノ錦ヲヒ

ロゲタラン心チノシ侍リテ、ムサシ野ハ行ドモ秋ノハテゾナキ、イカ
 ナル風カスエニフクラント、ハル〜思ヤリ侍リ。カクテヤウ〜分
 入テ見レバ、花ヲタオリテ家キセル僧アリ。年ハ五十バカリニヤナラ
 ント見ユルホドナルガ、花ノツクエニ法花經ナラベテ入於深山思惟
 佛道ト、タウトキ聲シテヨメリケリ。何スデノ人ナラント、床シク覺侍
 リテ、近ク寄、委クタヅヌルニ、郁芳門院ノ侍ニテ侍リシカ、女院ニオク
 レ奉リシ時、世ノサダメナク、ハカナサノ思ヒシラレテ、手ヅカラモト
 ドリヲ切テ住ナレシ都ヲバハナレ侍キ。サレドモ何ノツトメヲスベ
 シトモ思ヒ定メ侍ラズ、タドリアリキ侍リシ程ニ、說法ノミギリニ望
 ミテ侍リシニ、法花經ノ中ニ、十方佛土中唯一乘法無二亦無三ト説
 レテ、乘妙典ニスギテ目出タキ御法ナシト説レ聞エシ事、實ト覺エ
 テ法花經ヲ讀奉リテ、後世ノツトメトハシ侍ラント思ヒテ、オコタラ

ズ、ヨミ奉ルニナン侍リ。此野中ニスミテ、ステニオホクノ年ヲオクリ
 スレド、御經ノチカラニヤ、虎狼ニモアヤマタレズ、又クイ物ナドハ時
 時ユ、シキ天童ノ來リテ、雪ノゴトクニ白キ物ヲ一ツタビヌレバ、ク
 ハザルサキニ物ノホシクモナク侍ルナン「トイヘリ。ステニ仙人ニナ
 リニケルニヤ、天諸童子以爲給仕ノ妙文、コトニ有ガタクゾ侍ル。讀誦
 念佛ナンドハ無智ノモノカナラズ巨益ニアヅカル事ニ侍ル。此聖モ
 無智ニオハシケリ。シカハアレドモ、讀誦ノカズツモリテ、既ニ仙トナ
 レリ。我一ツヨロコベル事ハ、カクノゴトクニイミジキ人々アマタ見
 侍リヌレバ、サスガニ縁起難思ノチカラモムナシカラジト覺エ侍リ。
 世ニツカヘマシカバ、遙ニ雲井ヲ見アゲテ、色ナル袂ニ心ヲウツシテ、
 胸ノケブリハ富士ノ高根ニマガヒ、袖ノ露ハ清見ガタノ、ハヤキ波ニ
 ヨソヘテ、日數ハツモルトモ、思ヒハハル、スエナクテ、ムナシク此世

ハクレヌベカリシ身ノ、ハカナキ世ゾト思ヒナシテ、カク桑門ノタダ
 ヒトナリ侍テ、蓮臺ノ月ヲ望ミ、聖衆ノ來迎ヲマチテ、スコシノ善根ヲ
 モシ侍リヌト、思ヒシオリハ、法界ノ衆生ニサナガラオヨボシテ、一ツ
 ハチスノ上ニ廻向スルニ侍ル。抑我ラハ無上念王ノソノカミ、彼國ノ
 黎民ナンドニテ、縁ヲムスビ奉リケルニヤ、スバロニ彌陀佛ノ頼モシ
 ク貴トク覺エ侍ル。ナゲキノ家、カナシビノ戸ボソニモ、カコツカタト
 ハ、此佛ノ御名ヲトナヘ奉リ、戀慕哀傷ノタグヒ、貧窮孤獨ノスミカ、廣
 野燈キエテ秋風ヒトリスサマジキヤカラマデ、タバ頼ム方トテハ、此
 御佛ノミナリ。サレバ凡夫ノエンノフカクイマツカリケル事ハコレ
 ニテシリ侍リヌベシ。マコトニ有ガタクゾ覺エ侍ル。撰集抄第五

武藏野を詠める詩歌一束

武藏野文學十餘題—武藏野を詠める詩歌一束

こゝには主として在來の武藏野地誌書に載せざるものを觸目の
儘登載する。敢へて詩歌の巧拙に拘はらず。

武野草月

林 羅 山

月出武陵原上東。風光草際映長空。氷輪雖輾青々破。無迹無邊白
露中。羅山詩集

過武藏野

僧 鐵 牛

地沒海山天沒邊。誰教日月破蒼煙。望中唯有士峰雪。恰似老翁坐
碧氈。自牧摘稿

武州望上野諸峰在眼似不甚遠者。自午抵晡見但如故。逢人問程而
知一日不能到也。且寒風自赤城來。掠面稍勁。又見細雨霏然來。乃作

一絶

釋 圓 月

上野山高武野卑。相望去去到斜暉。天風吹落赤城雪。散入他州作

雨飛。東海一漚集。此篇恐らくは北武藏原頭の作

秋 夢

洞 院 公 賢

武藏野をわけつるよはの旅ねには夢も千草の色ぞ見えける家集
武藏野 道 堅 法 師

なをさりの袖だに露はふる里を秋立初めしむさし野のはら詠草
野 霧 中 院 通 村

むさし野や行末とをくたつ霧に猶しほれそふ旅ころもかな千慶首
霧中野 阿 野 實 顯

武藏野やけふも千種の露にのみしほれきてうき旅ころも哉千慶首
野 月 後 水 尾 院

むさし野や草の葉分にみえ初めて露より下にいづる月かげ御集
小鷹狩 上 田 秋 成

むさし野の尾花高かや踏みしをり小鷹手にすゑ行く人や誰藤子

武藏野

村田春海

雪もきえわか菜ももえて武藏野の春の光ぞかぎりしられぬ江戸名所集

莊園組織

序説

是より武藏野の郷村史を述べんとするに當り、豊島の莊、横山の莊、或は河越の莊などの名が隨所に顯はれて來る。この莊といふは今はあらぬことであれど、平安王朝より足利時代の半ば過ぎに至るまで、約數百年間我國に行はれて居た經濟組織の一體で、我國全體の歴史を知らんが爲にも、一地方の歴史を知らんが爲にも、是非とも知つて置かなければ

ならぬことである。殊に今も残つて居る古社古寺の若干は此組織の行はれて居る時代に出來たものであるから、此組織を知らなければ、是等古社寺の由緒を解することが出來ない。故に先づ、此莊——所謂莊園——の組織の概略の記述をせなければならぬ。

次に此組織の行はれて居る時代に當つて、我國には普通には豪族と呼ぶる、大名小名が隨所に起つた。殊に武藏には此大小名が頗る多く、通常武藏武士、或は武藏七黨武士と呼ばれて居つた。従つて此名も本書の各所に顯れて來る。故に一應はこの解説もして置かなければならぬ。

所謂莊園の意義

所謂莊園とは權門勢家神社佛閣等が地方に占むる私有の田莊である。我が國大化の改新にては土地は一切國有と定め人民には政府から土

地を均等に分け與へて耕作させるといふ法であつた。されど此法は間もなく行詰りになつた。第一に人口が増加し、社會の生活も發達して、土地が不足になつた。そこで政府は開墾獎勵をして、新たに土地を開墾したものは其地を子孫三代に傳へしめ、舊耕地を再墾したものには其身一代だけ耕作私有せしめた。しかし是も結果が面白くないので、次ぎには土地の永代私有を許可した。かくして國有制制定以來甚だ僅かにして其根本原則は破壊せられ、隨所に私有の土地が多く出來た。

既に土地の私有を認められることになつたから、都の權門勢家、貴顯摺紳等は頻りに手を地方に伸ばして、土地の開墾占有を始めた。地方官等も頻りに土地の利權漁りを始めた。是が抑も莊園なるものゝ起りである。所謂莊園の莊は別莊の莊である。莊は字書に「ゐなかや」城市の外などに別に設けたる田舎てんしゃ「しもやしき」など、解する。玉海には「置牛具、選習耕

兵士置屯田莊」とある。始めは都の貴顯摺紳が田舎みなかに持つて居る別邸の田畑といふ位の意味に過ぎなかつたのであるが、私有制を認められて以來、勢のあるもの、金のあるものは、盛に土地を開墾占有したから、後には數村、數十村を一括して一の莊園と呼ぶ様にもなつた。

武家支配の莊園

此外莊園の起りには種々ある。政府から功臣に賜つた土地もあれば、天皇から後宮皇子に賜つた土地もある。されど此組織は最も多く地方の豪族に利用せられた。豪族は自らの利益の爲に、其所有地を都の權門勢家或は近畿の大社寺に寄進して、其所領地即ち莊園とするものが最も多くあつた。しかも此場合豪族は自ら莊長莊司と稱して從來の通り土地の實權を握り、且つ此實權を子孫に世襲せしめた。權門社寺には只其

所領名義だけを進上し、名義料として年々若干の年貢を納むるに過ぎなかつた。昔時中央政府の権力の行渡らない時代には、此方法によつて或は國衙の課税を連れ、或は他の兼併を防ぐことが出来たのである。其の方法手段は恰も今人が租税の軽減を圖らんが爲、一大株式會社に財産を投入して、自らは其重役となり、權利を保留して居るのと同様であつた。語を換へていへば、持參金付で嫁入りし、所有名義は夫君に與へながら、實權は嫁自らが握つて威福を弄して居るのと同様であつた。又例へていへば、名譽會長を奉戴し會長給として年々若干の御手當を差上げ、實際會務は幹事長が統率して居るのと同様であつた。この場合幹事長は即ち莊長莊司である。この莊長莊司に對して名譽會長なる莊園名義上の所有者、又は、財産寄託株式會社の社長を、本所とも、又領家ともいつた。本所或は領家はまた其實權を子孫に相傳し、或は他人に讓

渡することが出来た。而して莊園内には此の本所或は領家に納める年貢を出す場所を定めて置いて、本所方或は領家分など稱することが多くあつた。諸所に本所或は領家など稱する地名の残つて居るのは此の爲である。また本所或は領家が神社佛閣である場合には、其神社佛閣の出張所が其莊内に勸請せられて居るのが普通であつた。

更に一例を挙げれば、本所領家と莊長莊司との關係は、奥州の伊達、對馬の宗氏等の如き地方豪族が豊臣秀吉に歸屬しながら、從來の領土は依然として其統治を許され、只時々の御用金と軍役とを勤むるに過ぎないのと甚だよく似て居つた。

之を要するに豪族の寄進したる莊園は小なる力のものが大なる力の者に依頼し、自己保存を圖らんとする精神より起つたもので、其組織も初めは簡單であつたが、漸次複雑となるに至つた。

以上の例として次ぎに下總葛西御廚みくらの話掲げる。

葛西御廚の一例

所謂葛西御廚とは今の東京千住、向島及び龜井戸の東方、南葛飾郡殆ど全部を稱した名で、伊勢大神宮の莊園であつた。大神宮の莊園をば莊とはいはず、特に御廚と呼ぶ習はしであつた。年貢を納めて庖廚——臺所——を賄ふといふ意味であらう。

この御廚即ち莊園は、其昔葛西清重が伊勢大神宮に寄進した土地である。清重の子孫は代々この莊園の莊長を勤めて居つた。而して伊勢大神宮には年々若干づゝの年貢を納めた。又大神宮を勸請し來つて今の常磐線鐵道龜有驛の附近なる猿が俣に祀つた。大神宮からは此處に領家職として占部氏が出張して御廚内から上る年貢の取扱ひをして居つ

た。

武藏には此の種類た。の莊園の數が相當に多くあつた。中にも有名なのは葛西御廚を始めとして、其北方今の中川と江戸川の間にあつた下河邊氏の下河邊莊、川越附近にあつた河越氏の河越莊、多摩川下流に近く橘樹郡溝口附近にあつた稻毛莊、東海道保土ヶ谷附近にあつた榛谷御廚はんがみくらなどである。前述の豊島郡の豊島莊、八王子附近の横山莊も有名であつた。何れも是等の莊園は上方かみかたの權門社寺の所領で、河越氏とか、豊島氏とかいふ豪族が莊長莊司として實權を握つて居つた。

莊園組織の廢滅

されど星移り物變るに從つて莊園の内容も大分變化して來た。年來實權を握つて來た莊長莊司といふものも、其地位を保ち難く、却つて後か

ら來た地頭といふものに其權力を奪はれ、すつたもんだの騒ぎの揚句あひくに其土地を離れたものが多くある。最も長く其地位を保つて來たものと雖、多くは足利時代の中頃より元龜天正にかけて他の豪族の兼併するところとなつた。

蓋し莊園に紛争はつきものであつたのであらう。始めより莊長莊司の内には、本所領家に對する約束の履行を怠つて年貢を滞納したものが多くある。この傾向は年と共に甚しくなつた。實際權力者の變化と共に遂には全く本所領家との關係を斷ち、年貢は一切實際所領者の只取りといふことになつた。葛西御廚の如きも種々の變化を経て、大永、享祿以來は小田原北條氏の所領となつたが、この北條氏時代に至つては、伊勢大神宮に少しも年貢を納めない。大神宮より北條氏に懸合つたところが、北條氏は「上古さういふ事のあつたといふことは先年承りましたが、

當家先祖以來其例は「ござりませぬ」といつて取合はなかつた。かくして葛西の地方と伊勢大神宮との縁は切れ、永き間の御廚も消滅した。是が徳川時代以前の實況である。されど今も猿が俣田圃の間には小さいながら、當時の伊勢神明社が残つて里人の崇敬を集めて居る。

武藏七黨武士

七黨武士の興起

前述の如く、土地の私有權を認められて以來、地方在廳の官吏等は中央の綱紀の緩めるに乗じて頻りに利權漁りを始めた。守も、介も、掾も、目も、まぐわん牧の別當も、苟も利のある處には争ひ赴きて其勢力を扶植した。殊に國

守は任期中荒地を開墾して私有するを許さるゝ定めであつたが故に、公然と自らの私有地即ち莊園を營むことが出來た。國守自らは任終つて京に歸つても、或は其子を派し、或は孫を遣りて土著せしめ、漸次根を張り枝を廣げた。介も目も別當も同様に同じ方法で其勢力を廣めた。武藏には斯くして起つた豪族が頗る多くあつた。中には京都から來た官吏に縁故のなき純然たる土豪で、勢力を得、多くの土地を併せたものまでが、僭して京官の子孫と稱するもあつたであらう。平安朝の終りから鎌倉時代にかけては、武藏の各地は殆ど全く是等の大小豪族で埋つた。普通是等の豪族を總稱して武藏七黨武士といふ。所謂黨とは、今日の改進黨、自由黨などの黨とは少しく異にして、血族の紐帶を以て結ばれ、或は結ばるゝと自稱する團體である。武藏には其黨が十種ばかりあつたけれども、何故か昔より七黨と稱して居る。

所謂七黨とは今の八王子邊に居りたる横山黨、其東日野郷より關戸連光寺邊、多摩川中流沿岸に居りたる西黨、北多摩、入間兩郡の境なる村山邊に居りたる村山黨、秩父郡より飯能邊に居りたる丹黨、兒玉郡に居りたる兒玉黨、其南猪俣邊に居りたる猪俣黨、埼玉郡騎西邊の田野に居りたる野與黨などである。或は是等の内一二を省きて同じく埼玉郡の田野に居りたる私市黨と秩父郡より今の太田郡本畠村邊、川越、江戸、豊島、葛西地方に廣がりて居りたる秩父黨を加ふることがある。又都築郡に居りたる綴黨つづきを加ふることがある。或はまた西黨の一派なる平山氏を一黨に數へることがある。七黨の名はありながら明瞭なる區別はついて居らない。七黨系圖などいふものもあれど、それも何處まで信じてよいか分らない。

又この七黨乃至八九黨の何れにも屬して居らぬものもある。たとへば

熊谷とか、足立とか、長井の齋藤とか、比企とかいふ類のものである。故に實際は七黨どころか、十黨も十二三黨もあつたのである。されど今は比較的完全と目すべき舊鈴木眞年藏本の武藏七黨系圖及び其他三四の舊記によつて所謂七黨武士の大概を述べる。

所謂七黨武士の分布

七黨武士中何れが特に有名であつたといふことは無けれど、横山黨の如きは其同族も多く、占有する地域も廣かつたから、先づ横山黨より述べ始める。

一、横山黨。横山黨は所謂横山の地方に居つた。小野篁より出づると稱する。篁七代の孫孝泰武藏守となり、子義孝武藏權介となり、遂に横山に其勢力を扶植した。子孫は八王子附近より相模川中流の地方に廣がり、

横山、梶田、海老名、藍原、平子、野村、山崎、鳴瀬、古郡、小倉、菅生、糟屋、由木、室伏、大串、千與宇、伊平、檜生、古市、田屋、八國府、山口、愛甲、小子、平山、石川、古澤、小野、古庄、中村、大貫、田名、小澤、小俣などの氏を稱し、殆ど同名の村々に居つた。又埼玉縣の忍附近に分れ住し、成田、大井、箱田、中條、玉井、別府、奈良等の氏を名のつたものもある。

一、西黨。西黨、或は日祀黨とも記す。日奉氏である。日奉宗頼武藏守となりて下向し、子孫のものは牧の別當——長官——或は在廳官などになつて漸次其勢力を廣めた。此一黨は主として多摩川中流沿岸に居り、西、長沼、上田、小川、稻毛、平山、川口、由木、西宮、由井、中野、田村、立河、狛江、信乃、高橋、清恆、平目、田口、二宮などの氏を稱した。今は一二其在所の分らぬ者もある。

一、村山黨。是は平家で、桓武天皇の子孫と稱する。村山貫主頼任を其祖とする。村山、大井、宮寺、金子、山口、須黒、横山、仙波、廣屋、荒波多、難波田等の諸

氏に分れた。多摩郡狹山邊より入間郡にかけて多く廣がつた。

一、丹黨。宣化天皇の後裔丹治家景の曾孫武信、天慶中武藏に配流せられ、秩父、賀美二郡を押領し、後免されて京都に上り、孫峰時より始めて關東に居住したと傳へる。其根據地は秩父郡で、薄、小鹿野、横瀬、中村、山田、黒谷、三澤、井戸、大河原、白鳥、岩田、野上、藤谷淵、名栗等の村々に居り、一派は分れて高麗郡飯能、加治、中山、高麗等に居り、又兒玉郡勅使河原、新里、安保、長濱、小島及び今の大里郡榛澤等に居つたものもある。何れも其住所と同じき氏を名乗つて居つた。七黨中有數の大族である。

一、兒玉黨。是は主として兒玉郡を中心として其羽翼を廣げた。一條天皇の長徳二年の頃、前の武藏權介有道維能、武藏に下り兒玉莊に居つた。其子維行武藏守となり、任滿ちて後、父の故地に住し、兒玉を氏とした。一説に維行は藤原伊周の子——其子孫は今の兒玉郡内四方田、蛭川、今井、

淺見——阿佐美とも——鹽谷、富田、眞下、本庄、小茂田等に居り、一派は分れて今の入間郡坂戸附近に來り、高坂、淺羽、粟生田、小代、越生、黒岩、成瀬等の村に居り、又舊高麗郡飯能の附近大河原等に居つた。更に上州に移つて高崎市の近郊倉賀野、大類、多胡等に居つた者もある。勿論其在所と同じ氏を名のつた。分布の廣い點に於ては此一族は七黨中の一二である。

一、猪俣黨。猪俣黨は横山黨の分れである。小野孝泰の孫時範より始まる。其子孫、今の秩父鐵道寄居驛附近なる大里郡大澤村大字猪俣を始めとして、小栗、河勾、荏原、太田、人見、甘糟、古郡、藤田、御前田、飯塚、今泉、櫻澤、南飯塚、岡部、内島、蓮沼、横瀬、瀧瀬、木部、男衾、尾齒、金尾など呼ぶ村々に分居し、同じく其在所の名を以て氏とした。古の那珂、榛澤二郡が此の一族の根據地であつたのである。

一、野與黨。野與黨は桓武平氏の流れで、平忠常の孫基宗が野與莊司と

なつたに始まるといふ。基宗の子基永、野與六郎と稱した。村山貫主頼任は即ち其弟である。所謂野與の地は今の何處であるか分らぬけれども、恐らくは騎西邊低平の田野の中であらう。この一族は羽生、騎西より岩槻邊にかけて廣がつた。野與、多名、鬼窪、白岡、澁江、萱間、道智、多賀谷、大藏、西脇、箕勾、大相模、柳生、柏崎、須久毛、八條、金重、野島、高柳等の氏を名のつた。然れども此の内には其在所の今以て分らぬものが三四ある。

以上七黨の外にて大族は秩父一黨である。此黨は其先祖は野與、村山兩黨と同じく桓武平氏で、平高望の孫村岡忠頼の子將常武藏權守となり、後秩父郡中村郷——今の秩父町大宮——に住したるに始まる。將常の子武基は秩父牧の別當となり、今の小鹿野町の附近下吉田に住んだと傳へられる。それより數世を経て重能に至り男衾郡畠山に移り住んだ。この

一族の者は江戸氏、河越氏、豊島氏、葛西氏となりて江戸、川越、葛西の地方に廣がり、又多摩川を南に越えて稻毛、小山田、榛谷等に住し、更に相模平野に移つて戸塚、藤澤に近く澁谷の莊に住したるものもある。勿論其在所と同じ氏を名のつた。この一族は普通七黨外に數へられるけれども、富と勢力の大なる點に於ては武藏武士中、この右に出づるものは無かつた。畠山氏は代々武藏國留守所總檢校といふ肩書を有し、武藏武士の總棟梁であつた。本書に論ずる武藏野の地域にも、此の一族の者は最も深き關係がある。

私市黨もまた相當に廣く分布した。私市氏は舒明天皇の子孫と稱する。私市家盛武藏權守となり、今の北埼玉郡騎西町附近に其基礎を定め、以來子孫は此地方と舊男衾郡とに廣がつた。中にも有名なのは今の行田宿の北、利根河畔の河原村に居りたる河原氏、熊谷宿の南、久下村に居り

たる久下氏などであつた。この外太田氏、成木氏、市田氏、楊井氏、小澤氏などあつた。後に掲ぐる河原有直、高直兄弟はこの一族である。

此外熊谷、足立、比企、武藤等の諸氏何れも貴族より分れ出たと稱する。

七黨武士の子孫

以上の武藏武士は保元平治の際源氏に従つて上京し、待賢、郁芳諸門の戦ひに勇名を馳せ、治承、壽永の役にも、西國各所に轉戦したので、保元平治及び平家物語、源平盛衰記等の軍記物に其名を歌はれて居る。源頼朝の霸業が成功するに及んでは、彼等は或は用ひられて守護となり、地頭となり、東西の諸國に派遣せられた。南は九州の端より、北は奥羽の地方に至るまで、彼等は羽が生えて飛んで行つた。薩摩海上の一島こしき甌島の島司となりたる小川氏は西黨の一族で、今の立川驛の西北二、三里西多摩

郡小川郷の出身である。肥後の山中、野原莊の地頭小代氏は兒玉黨で、今の比企郡高坂町字小代の出身である。筑前太宰府の少貳氏は、一説に青梅町近郊師岡の出身と傳へる。丹波の山中、河口莊の地頭となりたる久下氏は即ち私市氏の一族である。この外安藝、三河、近江、陸前の熊谷氏、伊豫、土佐、長門の金子氏など何れも武藏出身である。是等の人々何れも根を張り枝を広げて地方の大族となつた。長州の毛利氏、薩摩島津氏の重臣にも武藏出身の者が少なからずある。鎌倉初代は武藏武士の黄金時代である。彼等の子孫は武藏に絶えて諸國に残つて居るものが頗る多くある。其等の一部分は七百年後の今日始めて祖先の郷國に歸り來り東京の繁昌をなし、それでも足らなく漸次武藏野を人家で建て潰さんとして居る。昔は弓矢を片手に馬に跨つて飛んで歩いた人の子孫が、今は自動車に乗つて砂煙りを捲上げて走つて居る。

武藏武士の生活

單に七黨武士といはず、總ての武藏人は昔より剛勇を以て顯はれた。彼等は額には箭は立つとも背には立てじと揚言して、一心に君を護る東國人の中心であつた。仲哀天皇以後の三韓征伐には彼等は多く軍に従つた。應神天皇の御代に新羅を責め、又百濟王をして誓を立てさせた千熊長彦も武藏の人であつた。奈良平安朝時代に至つては、武藏の人は多く選ばれて九州の邊防隊、平城京都の宮城守衛隊に参加した。殊に前九、後三の兩役は大部分武藏の人を以て行はれたといふてもよい位である。されど、今は其等の詳述をなさず、直ちに七黨武士時代の生活の状況を觀察せんとする。

* * * * *

一概に武藏といふたところで、山地もあれば、丘陵地もある。武藏野の如き原野もあれば、埼玉田野の如き水郷もある。従つて其生活は土地によつて必ずしも一定でない。それ〴〵自然の環境に應じて特殊の生活を營んで居つたには相違ない。

されど、各地を通じて牧馬との關係は極めて親密であつた。或學者は武藏といふ語は朝鮮語馬城まじの轉訛だといふた程あつて、武藏には昔より牧場が多かつた。平安朝時代の延喜前後には京都朝廷左馬寮管轄の牧場に石川、由比、小川、立野の四牧があつた。又兵部省管轄の牧場には檜前馬牧、神崎牛牧があつた。其位置大體前の四牧は多摩川本支流の流域にあつたと解せられ、後の二牧中檜前は江戸淺草邊にあつたと解せられ、神崎は不明である。又別に小野牧があり、更に秩父には秩父、石田牧があり、兒玉郡には阿久原牧があつた。源平盛衰記、平家物語には騎西育ちの

駿馬といふ言葉もある。武藏に牧場の多かつたことは疑ふべからざる事實である。思ふに、當時東方向何れとして牧場のない國は無かつたが、特に武藏は平曠の原野が多かつたから、自然牧馬の業が發達したのであらう。蓋、其名の顯れない私人の小牧場はなほ澤山あつたのであらう。故に武藏武士なるものは齋藤實盛の語をかりていへば、牧の内より良馬を選び取り、立て飼ひて、早走りの曲進退の逸物を一人して五匹四匹持たぬものは無かつた。彼等は馬に乗りおほせて朝夕鹿狩狐狩して山林を家と思ひて馳せ習ひ、乗るとは知れども落ちることは無かつた。彼等の生活は明けても暮れても馬と共に終始して居つた。彼等は耕作をしないでは無けれど、彼等を廻る自然の風物は、彼等をして自ら狩獵生活に其半生を捧げしめた。

彼等の中には秩父の山中薄の僻郷に住んで居るものもあつた。薄は赤平川の一支流薄川の溪間で、平地殆どなく、人家は多く山の斜面を切り崩して建設するに過ぎない。今の人の目を以て觀れば決して生活の物資の得易き土地では無い。昔、如何に日常生活の物資少くして足りた時代にあつても、半ばは狩獵生活によらなければならなかつたのであらう。單に秩父山中のみならず、武藏野の直中、村山附近にしても同様であつた。若干の耕地水田は有つたといへども、狩獵によらなければ其生計の不足を補ふことが出来なかつた。其他の村々何れも同様であつた。茫茫八百里に餘れる武藏野原と、關東山脈に續く幾多の山嶺とは、自然に彼等を驅りて牧馬と狩獵とに親しませた。

武藏人の生活はかくの如くであつたが故に、勢ひ彼等は剛勇慍悍の氣象を備へざるを得なかつた。勿論或學者のいふが如く、武藏人の血液中にはアイヌの系統の流れ居るにもよるべけれど、主としては其生活の

状態よりかくは勇武になつたのである。

彼等武藏武士は戦ひに臨むに當つては生死は殆ど眼中に無く、父死ぬればとて子も引かず、子討たるればとて親も退かず、死ぬるが上を乗り越え、戦つた。彼等の弓は三人張り、五人張り、矢束は弓に應じて十四五束、十五束あり、其射術また巧妙にして空矢を射るものは無くあきまを數へて一矢にて二三人を射落し、鎧は二兩三兩を射貫く程である。斯様なるもの、大名一人の内には二十人三十人あり、無下の荒郷一所の主にも二三人は養つて居つた。源平盛衰記に據る

武藏武士の性格

彼等武藏武士の最も重んずるものは其名と廉恥とであつた。戦ひに臨むに當つては其祖先の戦功より述べ始め、我が身の經歷をも唱へて敵

に挑みかゝるを例として居つた。名の爲には其生命を棄つるを惜まなかつた。一たび恥しめらるゝや、死を以て是に當るを常とした。拔け驅けの先陣功名は彼等が何時も念頭を離れぬ素願であつた。弱い、卑怯、といはれるのが、彼等の最も嫌ひなことであつた。彼等はまた義理堅くして主君の馬前に死ぬるを以て最も名譽とした。前述の如く一つ心に君を護るといふが彼等の信條であつたのである。

彼等はまた多感多涙にして、最もものに感動し易かつた。紅鐵漿ツけた敵の小公子を組伏せながら、我が子小次郎を思ひ出し刀を首に當て兼ねて味方の勢に迫られ、泣く泣く是を殺した熊谷直實の如きものもあつた。我が身の小身にして功を立て難きを嘆き、弟を残して兄は死なんとはいへば、弟は兄と共に死なるといひて、只二人下部をも具せず敵陣に駆け入り、縦横無盡に斬りまくつて戦死したる私市の河原太郎高直、

同じく次郎盛高の如きものもあつた。

剛健にして質實、勇敢にして従順、正直、廉潔等幾多の美點を彼等は備へ

て居つた。足利時代の名僧義堂も彼等の勇氣を賞して次の如くいふた。

武之俗直而好勇、州以武名宜矣。故世爲用武之地。出壯士佐大軍、而奮身

賈勇、策先鋒、之勳輔霸王之業者夥矣。空華集卷第十二

直にして勇を好むの一語、武藏武士を評して餘りありといふべきである。

* * * * *

されど、彼等の間にも随分矛盾な事が多くあつた。長所の反面には短所も少くなかつた。何いたせ、當時東國は未だ文化が普及せなかつた。一般東國人の習ひとして、彼等は多くは無學で、其性は粗朴であつた。本國にありては一郷の主でありながら、都に上つては貴族の驅使に任じて甘ん

じて居る者もあつた。或場合には彼等の眼中には只利益あるのみであつた。其利の爲には兄弟叔甥尙且多くの争ひを生じたこともある。惡源太義平と帶刀先生義賢とが、大藏に於て戰つた如きは其一例である。彼等は無學であるが故に、その性格はまた極めて簡單透徹であつた。義に就き恩に感ずること、も早けれど、義を棄て恩を去ることも一朝一夕の仕事であつた。彼等は死を輕んじて戰へども、勢に附くことは草の風に靡くが如くであつた。今日の敵忽ち明日の味方となるは普通のことであつた。彼等の進退は多くは只その所領の安堵を得んが爲であつた。嘗つては僅々十七騎で敵五百騎の中に斬つて入り、軍敗るゝに及んでは再舉を約して涙ながらに其主と分れながら、其主の遺子の兵を擧ぐるに及んでは、昔を忘れて眞先きかけて味方を攻め來つた勇士もあつた。勢の爲には軍の總大將となつて我が外父を攻めに行つた猛將もあ

つた。保元平治より治承、壽永にかけての豪傑、多くは昨日は源氏、今日は平家、明日は源氏に復歸したる人々である。其出處進退多くは只我が身の安全を保つが爲であつた。大凡この時代の習ひとて、味方に勢せいのつきぬれば、大名、小名、別當、莊司、檢校、介、允なんといふものまで、二十騎、三十騎、五十騎、百騎、招かずとも馳せ參するものである。一たび味方の勢の敗るれば、蜘蛛の子を散らすが如く散亡するものである。

彼等の下部しもべに至つては無學無智、みだりに感じ、みだりに怒り、一言の耻辱にて其友を殺し、一片の獎辭にて其身を捨つるが如き簡單なものであつた。戰爭に出づるに當つては最も踴躍して之に赴いた。従つて其行爲また殘忍冷酷の事が多かつた。味方の大將の外父にして今年八十歳に餘れる三浦の義明が、諸兵を散去し我が身一人城に残つて居るに拘はらず、一度敵となりぬる上は、押入つて引摺り出し、其衣裳を剝奪して

裸體とするの無禮をも敢へてした程である。これ敢へて武藏武士に限つたことではない。軍陣の勇者は東西古今殆ど其揆を一にすることではあれど、保元平治物語、源平盛衰記等の軍記物語に顯はれたる武藏武士の性格の一面は實にかくの如きものであつた。

* * * * *

しかも我が武士道なるものは多くはかゝる性格を有する東國武士の間に發達した。今日の進歩したる高等道德の眼を以て之を觀れば、幾多の缺點短所はありながら、總じて勇猛、正直、信義、忠實、廉潔等幾多の美點を彼等は持つて居つた。みだりに感じ、みだりに怒るといふも、正直にして天真爛漫であつたからである。所謂江戸つ子氣象、神田つ子氣質といふものは、彼等の間には極めて多分に存在した。また所謂上州長脇差の氣分といふものも相當に多く備へて居つた。今日の眼を以て缺點と思

はるゝ所は、實は彼等の長所であつたのである。勢に従つて進退を二三にするは、昔も今も其揆を一にすること敢て怪むに足らない。吾人はこゝに至つて史記の匈奴傳の一節を想起せざるを得ない。曰はく、
兒能騎羊、引弓射鳥鼠。少長則射狐兔、用爲食。士力能彎弓、盡爲甲騎。其俗、
寬則隨畜、因射獵禽獸爲生業。急則人習戰攻、以侵伐。其天性也。其長兵則
弓矢、短兵則刀鋌。利則進、不利則退。不羞遁走。苟利所在、不知禮儀。自君王
以下、咸食畜肉、衣其皮革、被旃裘。云々

匈奴の勇はかくの如きものであつた。然れども此の勇氣を以て、匈奴は我よりも遙かに文化も進み、土地も廣く、人口も多き漢族と戦つて常に勝利を得、屢、漢族を統御するの地位に立ち得た。同様に一般東國人も、武藏武士も之に類したる勇氣を以て、一時天下を風靡することが出来た。文明を誇る西國人を後へに瞠若たらしむることが出来た。太平記の記

者が楠正成の口をかりて「若勢を合て戦はゞ、六十餘州の兵を集めて武藏相模の兩國に對すとも勝事を得がたし」といへるは事實である。されど「若謀を以て争はゞ、東夷の武力唯利を摧き堅を破る内を不出。是欺くに易くして怖るゝに足らざる所也」といへるは、未だ必ずしも當れりとはいひ難からう。

しかも武藏武士の無學なのは鎌倉時代だけであつた。鎌倉の覇府百五十年間に文明の風は海越え山越え關東の隅々まで吹き互つた。この時代の末には中巖圓月の如き一代の學僧の撰んだ銘を刻したる巨鐘が武藏野の一隅に現るゝに至つた。殊に足利時代の中頃文明年中に至つては、武藏野の原頭多士濟々、文質彬彬々、詩歌俳諧に巧みなる武士が多かつた。委しくは各論に入つて説明する。

武藏武士の性格を顯せる一例

さる程に悪源太は其のまゝ六波羅へ寄せらるゝに、一人當千の兵ども、眞先に進みて戦ひけり。金子十郎家忠は、保元の合戦にも爲朝の陣にかけ入り、高間三郎兄弟を組て討ち、八郎御曹司の矢先をまぬがれて名を揚げけるが、今度も眞先かけて戦ひけり。矢だねも皆射盡し、弓も引き折り、太刀をも打ち折りければ、折太刀をひつさげて、あはれ太刀がな、今一合戦せむと思ひて駈け廻る處に、同國の住人足立右馬の允遠元馳せ來れば、これ御覽候へ、足立殿、太刀折れて候ふ。御はきそへ候はゞ御恩に蒙むり候はむと申しければ、をりふしはきそへなかりしかども、御邊が乞ふがやさしきにとて、先を打たせたる郎等の太刀を取りて金子にぞ與へける。家忠大に悦びて、又駈け入りて敵あまた討ちてけり。足立が郎等申しけるは、日ごろより御前途に立つまじき

ものと思しめせばこそ、軍の中にて太刀を取りて人に給はるらめ。此の程は最後の御供とこそ存せしかども、これほどにみかぎられ奉りては先き立ち申すにしかじとて、すでに腹を切らむと上帯をおし切りければ、遠元馬より飛びて下り、汝が恨むるところもつともことわりなり。然れども金子が所望もだしがたさに御邊が太刀を取りつるなり。軍をするも主のため、討死する傍輩に乞はれてあたへぬものや侍らむ。漢朝の季札も徐君に劍をこはれて惜まずとこそ承れ。しばらく待てといふ處に、敵三騎來りて足立を討たむと駈け寄せたり。遠元眞前に進みたる武者をよく引きてひやうと射る。其の矢あやまたず内兜に立ちて、馬よりまさかさまに落ちければ、殘の二騎は馬を惜みて駈けざりけり。遠元やがて走り寄りて、はきたる太刀を引き切りておつ取り、汝が恨むる處もつともなり。太刀とらするぞとて郎等にあ

たへ、うち連れてこそ、又駈けけれ。平治物語、六波羅合戦の事

都人の記せる一武藏人

平判官入道康頼

我朝武藏國ニ玉ノ火丸ホマルト云者アリ聖武ノ御時也上京シテ人ノ供ニ母ナド具シテ、鎮西へ下向シテ太宰府ニ住ケル程ニ、主人上京シケル供ニ上ルベキニアリケルニ、思ハシキ妻ヲ設ケタリケルニ離レジトテ、障リヲ致シテ停ンガ爲ニ、母ヲ山へ具シテ行テ殺ントスル時、大地俄ニ割テ火丸落入ケルヲ、母悲テ鬢モトトリヲ取テ引上ルニ、鬢ハ抜テ主ハ地下ニ落入ヌ。誠ニ我命ノ失ン事ヲバ恐レズシテ、敵トナル子ヲ引上シハ無和利コソ覺ユレ、生ヲ受タル本意ハ父母孝養ノ志バカリ也。寶物集第五、武藏國玉火丸

武藏野遊歴或は研究の古人

著者は十餘年來武藏野を遍歴して、或は史蹟名勝を訪ね、或は古文書、古

記録類を漁つた。今では武藏野宗の納所坊主位にはなつたと自ら信じて居る。然れども古來著者の如く武藏野を遊歴して、此宗派の僧正大僧正になつたものもあれば、一寸足を入れて新發意位しんぱちになつたものもある。自然是等の人の事が本書の隨處に顯はれ出づるから、一應は是等の人と武藏野との關係を述べて置かなければならぬ。

王朝時代の武藏野旅行者

場所を以ていへば、四方各八九里、時を以ていへば上下茫々一千餘年、この間武藏野を遊歴したる人の數は限りもなく多くあるであらう。されど今は其全部を述べることは到底出來ない。僅かに本書の記事に直接關係ある數人者に止めて置く。それも平安王朝以前には派らない。平安王朝時代に當りて武藏野を旅行したる一人は在五中將在原業平

である。業平は父も母も皇子皇女で、桓武天皇にも平城天皇にも御孫に當る。兄行平と共に在原の氏を賜はり、文德天皇の皇孫女を妻としたる貴公子であるが、當時藤原氏の勢のみ盛にして一身の榮達を圖ることが出来なかつたから、鬱憤を和歌に漏らした。其和歌は多く伊勢物語に出て居るが、東國巡遊して武藏に來り、隅田川にて都鳥の歌を詠じた。今の東京向島の言問の渡邊は其遺蹟だと傳へる。又今の川越附近に遊んで美人の臨時婿となり、みよし野の田の面の雁の歌を詠じたと傳へる。又人の娘を盗みて武藏野に連れ出し、國守に捕へられんとし、娘を草叢の中に隠して逃げたと傳へる。右は一々確かなる事實とは受取り難けれど、伊勢物語に出て居る昔物語で、一般に業平の爲した事だと思はれて居る。委しくは各論中の諸所に説明する。

次に武藏野を旅行したものは、上總介菅原孝標の女である。彼女は父と共に上總の國府に行つて居つたが、後朱雀天皇の長元九年九月父の任満ちて京都に歸るに従ひ武藏野を通過した。その時の事が後年彼女の記述したる更科日記に出て居る。是に據れば、彼女父子は九月半ば今の江戸川、當時太井川と呼んだのを渡り、やがて武藏國に入り、馬に乗つて持つて居る弓の末の見えぬまで高く葦荻の生ひ茂つて居る武藏野を分け行き、竹芝といふ處に至つた。此處にて、嘗つて武藏國より上つた禁中火たき屋の衛士が、皇女と共に出奔し來つて此處に住んで居つた、といふ昔物語を聞かされたといふ。されど是は今の東京芝區あたりの事だと一般に解せられて居るから、敢へて詳述はせない。

平治元年藤原信成入道の倅播磨中將成憲は下野の國に流され、武藏野を通過した。されど其時の事は平治物語に、

足柄山をも越えぬれば、いづくを限りとも知らぬ武藏野や、はりがね

の井をも尋ね見て行かば、下野の國府に著きて云々とあるだけである。

鎌倉南北朝時代の旅行者

鎌倉時代に至つては西行法師が武藏野を遍歴した。西行は俗名は佐藤義清、勇敢にして射を善くし、鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任せられた。又和歌が非常に巧みであつた。されど二十三歳にして厭世の念を抱いて出家し、以來諸國を行脚し廻つて花鳥風月に其懷を慰めた。武藏野にて舊郁芳門院の武士が隱棲し、法華經を讀んで居るのに出會つたことは、既に述べたる如くである。其の厭世思想も既に掲げたる撰集抄の文に委しくある。

* * * * *

南北朝時代に武藏野を旅行した人には僧宗久がある。宗久は九州の人、風月を友とし和歌を善くし、諸國を週遊して足跡六十餘州に遍かつたといふ。嘗つて丹波大江山の麓に庵を結んで居つたが、觀應中東遊して陸奥の鹽竈に至つた。途中箱根路より常陸に行き、甲州に行き、二たび武藏野に來り、各所を遊歴して秩父山中の某草庵にて一冬を越した。されど其著都のつとには武藏野に關する記事は餘り多くはない。其一節は既に掲載した通りである。

漆桶萬里

足利時代に至つては武藏野の遊歴者は相當に多くある。中に就き最も有名なのは僧萬里、道興、准后、堯惠法印及び宗祇、心敬、宗長等々の詩人連歌師である。

僧萬里は名は瑞九、萬里また梅菴と號した。元は京都相國寺の住僧であつたが、後還俗して漆桶と稱し、美濃鶉沼に新居梅花無盡藏を營んで居つた。詩文に工みで、諸國文雅の士と交際して居つたが、關東の上杉定正、其家老太田道灌なども早くより書狀の交際をして居つた。遂に文明十七年の秋九月七日、六十歳の老軀を提げ、鶉沼を立つて東遊し、十月二日江戸に著いて太田道灌にたよつた。是より江戸に滯留すること足かけ四年、長享二年八月十四日江戸城を發し、比企郡平澤の太田源六資康の陣中に入り、月餘を経て九月下旬北國越後に向つた。此間或は鎌倉六浦に遊び、或は越生谷太田道眞の亭に遊び、或は木戸きよ罷釣の隅田川上流の邸に往來した。又或は大石定重、吉良成高等の爲に詩文を草し、或は名僧高士と會して風月を弄んだ。委しくは各論中の諸所に掲載する。

道興准后

道興准后は從一位關白近衛房嗣の第三男である。幼にして出家し、長じて聖護院の門跡を嗣ぎ、又園城寺長吏三山檢校となり、大僧正に昇り准三后となつた。准三后といふのは皇后、皇太后、太皇太后に准じて年官年爵を賜はらるゝ身分である。かくの如き身分でありながら、寶徳三年職を辭して後は、花鳥風月を樂んで一蓑一杖に身を托し、諸國を行脚した。その東國行脚を思ひ立つたのは、文明十八年六月六十歳の時である。月の上旬公武に暇乞ひし、東山殿義政、將軍義尙等とも訣別し、今年八十五歳になる父の房嗣とも別を惜み、先づ若狹小濱に至つた。それより北陸諸國を經、越後より上野に入つた。初めて武藏に著いたのは秋八月の頃であつたと思はるゝ。是より下總、上總、安房、常陸、下野、相模、駿河、甲斐等の

諸國を遊び、武藏には前後四回程足を入れた。

其旅行記廻國雜記は折に觸れての記録と見えて、旅程等も規則だつて明かには分つて居らねど、最初に武藏に來た時には榛澤郡岡部原より北埼玉郡成田、村君の邊を通つた。次ぎには常陸筑波より歸つて岩槻、淺草、江戸を経て鎌倉に至つた。第三回には鎌倉より南多摩郡關戸に出で、今の北多摩郡國分寺村戀が窪に至り、それより北足立郡志木町邊の宗岡宿に至つた。又堀兼井を見て入間川を渡り、高麗郡笹井の觀音堂に至り數日逗留した。笹井觀音堂は聖護院門末であるからである。又同じ聖護院門末なる大塚の十玉坊の許に至り相當に永く滞留した。而して此間に川越、勝呂、野火止、膝折、所澤、久米川などに遊んだ。又大塚滞在中に出立以來始めて父房嗣の書信を得て、且つ喜び且つ戀慕した。又同じ聖護院門末なる今の西多摩郡鹽船の觀音堂にも十日ばかり滞留したと

思はるゝ。當時の武藏野の豪族江戸河越の上杉氏との交渉は餘り無かつたと思はるゝけれども、同じ武藏野の一豪族大石定重とは屢、往來して詩歌觀月の席に會した。十九年の正月は遂に武藏野にて迎へた。

道輿の最も好きなのは武藏野の野遊であつた。文明十九年正月六日、元日以來降り積つた雪のやゝ融けたのを見て、野に出で若菜を捜して、

むさしのにけふつむわかな行末の限しられぬよの例かも

と詠じた。又或時は武藏野に出で酒飲み遊び、雲雀の揚るを見て、

若草の一本ならぬむさしのおつる雲雀も床まよふらん

と詠じた。かくて武藏野には秋の末より、梅の花が咲き雲雀の揚る頃まで滞留して、一月末か、二月の初めに甲州に至つた。それより十餘日を経て二月上旬四度武藏野に入り、今の入間郡坂戸町及び片柳村の邊を通つて下野に至つた。やがて、それより奥州鹽竈に至つた。京都に歸つたの

は何れ是年の末頃でもあらうか。大永七年七月九十八歳の高齡を保つて入寂した。其著廻國雜記の記事は武藏野に關することが全體の約三分一を占めて居る。又此旅行中武藏野に滯留した日月が一ばん長かつた。聖護院前住であるから、聖護院門末の各坊を訪ねて歩いたのである。

堯惠法印

道興と時を同じうして武藏に來たのは堯惠法印である。この法印は文明十七年秋京都を立ち、暫く美濃に滯在して、翌十八年五月飛驒の山を越して越中に出で、信濃の善光寺に參詣し、越後に廻り府中——今の直江津邊——柏崎を経て三國峠より關東に入つた。武藏に著いたのは十二月中旬で、廳の鼻——今の深谷岡部邊——より熊谷、箕田を経て鳩が谷に至り、滋野憲永といふ武士の許に寓した。それより江戸鳥越に來り、此處にて

越年し、正月二十日過ぎまで滯在した。この間に忍が岡、湯島天神等を遊歴した。それより鎌倉に至り、六月末には再び武藏に來て、其廿八日、中野——今の中野町なるべし——平重俊の家に寓し、七月七日には再び鳩が谷に至つた。而して秋風と共にまたもや三國峠を越えて北國に去つた。彼もまた武藏野愛著者の一人である。今の東京西部中野邊の原野にて夏六月富士の白雪を見て、

夏しれる空やふじのね草のうへの白雪あつき武藏のの原

と詠めるは有名である。けれども彼は道興ほどには武藏野に親まなかつた。多摩、入間兩郡に跨がる所謂武藏野は只中野町近郊堀兼の井邊を歩いただけである。従つて其旅行記北國紀行には廻國雜記に於けるが如く、武藏野に關する記事は多くはない。

心敬、宗祇、宗長

心敬、宗祇は共に有名なる京の連歌師である。而して共に應仁の亂を避けて文明の初年武藏に來り、江戸河越の間に淹留した。この兩人のことは後冊川越市の條下に詳述する。

* * * * *

連歌の系統からいへば、心敬は宗祇の先輩で、宗祇は宗長の師匠であつた。宗長は東海道島田驛鍛冶屋の子で十八歳の時出家した。其後京都、奈良、高野に遊び、宗祇に就いて連歌の事を學んだ。永正元年今川氏の被官齋藤安元に勧められて、東海道鞠子驛の附近泉谷吐月峰下に小庵を結んで居り、柴の屋と號した。武藏野に來たのは前後二回で、第一回は永正六年七月十六日、吐月峰下の庵を出で箱根、藤澤を経て、八月十一日武藏

野の勝沼——今の青梅町——に著いた。こゝにて領主三田彈正忠氏宗の家に寓し、居ること十五日にして上野に去り、歸來また勝沼に立寄り、武藏野を踏分けて江戸に至つた。江戸に六七日、品川に五六日滞在して房總に遊び、再び江戸品川に來りて數日を送り歸郷した。

第二回は文龜元年六月越後國府に居る師匠宗祇を尋ねて行つた時で、歸りには宗祇と共に上戸河越、江戸に淹留し、此間に約二個月を費した。其著述東路の津登及び宗祇終焉記は此兩回の旅行記である。委しくは各論中に述べる。

十方庵主釋敬順と村尾正靖

徳川時代に至つては江戸が學問の淵藪となつただけに、武藏野を巡遊する雅人墨客は洵に多かつた。其中には單なる風光の觀賞家もあれば、

武藏野遊歴或は研究の古人——心敬、宗祇、宗長——十方庵主釋敬順と村尾正靖 九三

歴史地理を研究せんとする特志の人もあつた。而して其多くは此兩者の趣味を兼ね味はんとした。

* * * * *
 單なる風光の觀賞家にては、第一に指を江戸小石川本法寺末廓然寺の舊住職十方庵主釋敬順に屈せざるを得ない。敬順名は大淨、江戸本所に生れた。其祖先は尾張より出で、織田信長の一族と稱する。文化八年寺を子大恵に譲つて十方庵に居り、花鳥風月を友とし茶事を弄んで居つた。最も旅行が好きで、折だにあればたゞみ焜爐と茶器とを携へて杖を江戸の近郊に曳いた。而して到る處で茶を煮て水の善惡を批判し廻つた。殊に武藏野は彼が最も喜んで歩いたところで、豊島郡石神井池畔、同志村前野清水、上板橋水川社前の河岸、入間郡高麗河畔など、何れも彼が茶を煮た跡である。其旅行も多くは日歸りか一二泊位であつたが、時によ

つては十數日に餘る旅行を續くる事もあつた。武藏野の遠出の旅行では、西多摩郡の青梅を経て多摩川の上流小河内鶴の温泉に入浴したこともあれば、柳澤、所澤、飯能を経て秩父の山中に入り、川越を廻つて歸つて來たこともある。北多摩郡の府中、國分寺などへは二度も三度も遊びに行つた。遊歷雜記は彼の旅行記である。彼が旅行を好む趣旨は遊歷雜記の諸所に記してある。

然れども彼は餘り學問は無かつた。遊歷雜記に其巡遊した地方の古事を記してあることもあれど、其等多くは里人から聞いた儘を記したので、一々は信用し難い。又遊歷雜記中非常に名文だと思はるゝ處が、案外他の人の文章其儘の借用であつたりする様な事が往々にしてある。されど何といつても彼は武藏野旅行家中の巨擘である。

* * * * *

敬順の如く遠出はせなけれども、村尾正靖も武藏野旅行家の一人である。正靖は通稱源右衛門、嘉陵また伯恭と號す。長州の生れで、清水家廣敷御用人を勤めた人である。若き時より江戸近郊の遊歴が好きであつた。殊に六十歳前後より七十四五歳にかけて頻りに四方を出歩いて行遊記を作つて置いた。彼は敬順とは方法を異にして、一瓢を携へ歩き、渡船に乗つて居る間にも一酌を試みんとし、途中柿を買つて喰ひながら歩く程の元氣ものであつた。身體も甚だ強健で、七十四歳の秋の短日に八里餘の道を歩し、百メートル餘りの岡に登り、それを降つて更に半里餘を行きて一泊し、翌日直ちに歸宅した程の剛の者である。學才は寧ろ敬順以上に多くあつた。その行遊記は後世傳寫せられて四方の道草、或は嘉陵紀行などと呼ばれる。帝國圖書館藏本には四方の道草とあり、内閣文庫本には嘉陵紀行とある。されど惜いかな、兩本共に散佚出入があつ

て完本ではない。又傳寫の誤もある。近頃刊行の江戸叢書中には嘉陵紀行の名にて出て居る。又正靖自筆の稿本は江戸近郊道しるべと題し、今は帝國圖書館の藏本となつて居る。されど是も虫喰敗爛が多く、全文を解し難き箇所が甚だ多くある。

武藏野の古事研究の諸家

武藏野の古事來歴研究の目的を以て旅行したもの、第一は、一萬五千石の大名の隱居様松平定常である。定常は冠山また冕嶠陳人と號する。播州福本池田氏の分家に生れ、因幡鳥取池田侯の分家を相續した人である。性來文學が好きで、あらゆる書籍の讀まざるものなく、寛政中江戸城柳間詰の諸侯中では是に及ぶものが無かつた。致仕の後著述を事とし、當時の高僧碩儒と往來交遊し、學問の爲には少しも城壁を設けな

つた。殊に武藏野の古蹟名勝を研究するを好んで、自らも各地を巡歴して實地調査をなし、齋藤幸雄等の江戸名所圖會や、植田孟縉の武藏名勝圖會、齋藤鶴磯の武藏野話等にも序文を書いた。武藏野に關する著述も四神社閣記、武藏風土記箋註、同考證、武藏名所考等數種ある。中にも武藏名所考は版本となり世に行はれる。何としても定常は武藏野研究の大立物で、また當時流行し出した武藏野研究の開祖の一人である。定常にはまた武藏野以外の著述及び各種地誌書の解題等が頗る多くある。大正十三年二月從四位を贈られた。

次に掲ぐべきは武藏野話の著者齋藤鶴磯である。鶴磯は通稱宇八郎、諱は敬天、字は之休、江戸の人である。四十餘歳の時より今の入間郡所澤宿に移り、約二十年間滯留した。此間に武藏野の各地を遍歴して寺社、古

碑、古戰場等の來歴を調べ、又古文書をも漁り、風景をも賞美した。殊に古碑、古蹟等は多く寫生圖まで採つて置いた。其足跡は武藏野の全部には互らぬけれども、苦心骨折は尋常のことでは無かつた。武藏野話は其の苦心の結果出來た本で、當時の學者の武藏野を論ずる者、何れも此書を參照せざるはなかつた。有名なる洋醫シーボルトも是を買つて和蘭まで持還つた程である。

鶴磯は後幕府に仕へ江戸深川に居つたが、晩年また所澤の附近今の北多摩郡大和村中藤に移り居つたと傳へ、今も子孫は其處に残つて居る。

古河古松軒もまた傳ふべき一人である。古松軒は名は辰、平二兵衛と稱す。備中岡田村の人である。數學に精しく、地理學を好んだ。少小にして四方を遊歴し、其足跡は奥羽、蝦夷、筑紫、薩隅、鬼界島まで及んだ。寛政中徳川

幕府に召されて、江戸府外豊島、多摩、荏原、足立、葛飾五郡の内、江戸より五六里乃至七八里の地方の地理風土を視察し記録して差上げた。是即ち四神地名録である。四神地名録は今日にては餘りに參考にもならぬ本であるけれども、一々實地の討査であるが故に亦捨て難き味がある。古松軒は後郷里岡田村に退き悠々風月を樂んで居つたが、其邸内に一古松があつた。古松軒の號はそれより起つたといふ。

更に傳ふべき一家がある。これ江戸神田雉子町の名主、齋藤市左衛門の一家、父子孫三代である。市左衛門といふは、此家代々の通稱で、父幸雄松濤軒長秋、子幸孝縣鷹、孫幸成月岑、三代揃ひも揃つて江戸及び武藏野の古蹟名勝を研究調査したる特志家である。江戸名所圖會は始め幸雄が編輯したもので、寛政十二年に一たび脱稿したが、幸孝に至りて訂正増

補し、幸成の代に再び補訂を加へ、始めて出版することが出來た。業を始めてより完成に至るまで數十年餘を費した。この書の出版を終るや、幸成は更に東都歳事記三冊を出版し、又武江年表八卷をも發行した。幸成の事に熱心なのは、安政大地震の際其家の將に傾かんとするをも顧みず、家人にも告げず飄然として家を出で、數日間破壊の實況を見て後世の爲筆記し置いたと傳ふるを以ても知られる。明治十一年三月六日七十五歳で死去した。

江戸名所圖會は名は江戸と雖、半ばは江戸近郊の名所圖會で、遠くは入間郡山口の觀音あたりまで記してある。

この外武藏野遊歴或は古事來歴研究の諸家に、江戸の博識家太田南畝、武藏濱路の著者大橋方長、武野八景の著者大久保忠休、玉川浜源日記の

著者黒田庄左衛門等あれど、さまでとはとて省いて置く。

武藏野の文書記録保存の恩人

然れども茲に一人の省くことの出来ない人がある。それは徳川八代將軍吉宗である。吉宗は敢へて武藏野遍歴者といふわけではない。又敢へて武藏野の歴史地理研究家といふわけでも無い。然れども武藏野に於ける古文書、古記録、古武具等の保存に重大の関係がある。吉宗が將軍職に就くや、吏を四方に派して諸國の古書籍、古文書、古記録を採訪させ、又古武器、甲冑、古書畫の類を點檢したことは、學者周知の通りである。吉宗の此舉は世人に對して是等の物品の保存を注意せしむる警鐘となつた。武藏野には次の一例がある。

一札

師岡山城殿方より 原島彌次郎への書狀壹通

師岡采女祐殿より 原島新右衛門への書狀壹通

右貳通之書中當五月 上様御披見相濟、此方役所へ相下り候上ハ、已來虫ぼし隨分念入、大切に所持可仕ため、添書相渡置候條、仍如件。

寛保元年酉十二月 大屋奎之助記之

武州多摩郡丹三郎村

持主 市右衛門

武右衛門

五郎兵衛

東京府西多摩郡古里村原島利三郎氏所藏

これ幕府の吏僚青木昆陽等が採訪して吉宗が親閲したる文書の返還に當り、其地方の代官をして附せしめたる添狀である。單に將軍の御覽

に入つたといふ一事のみだに、當時にては絶大の名譽なるに、かゝる状まで添へられたのでは、如何に無頓著なる地方人にしても、自ら所有する文書記録の保存に注意せざるを得なかつたのであらう。果然この新右衛門の家には當時の文書が今も其儘保存せられてある。

單に是のみではない。吉宗は又古武具等の修繕を要すべきものには資を給して修繕せしめ、或は幕府の手にて修繕を加へしめて返還した。其好例は同じ西多摩郡三田村御嶽神社にある。吉宗は御嶽神社所藏の大鎧を江戸城中に取寄せて一覽した。而して餘りに破損して居るからといふので、具足師岩井源兵衛に命じて修繕せしめて下渡した。其際向後大切に取扱ひ保存すべきを命じ、又神主に江戸往返の費用として白銀十枚を賜つた。神主は歸つて之を一山中に披露し、以來此大鎧は大切に保存することゝなつた。今は此鎧は國寶となつて居る。吾人が今日何の

苦もなく、この稀代の國寶を見得るは一に吉宗の御蔭である。單に以上の二例だけにても、吉宗が古文書、古記録、古武具保存に與つて大なる力のあつたことを想察するに充分である。

新編武藏風土記稿編纂の事業

しかし吉宗時代の探訪にも松平定常以下の研究にも増して、武藏野の古文書、古記録の一大結集と、歴史地理研究の進運とに貢献したのは、何といつても文化七年以來大學頭林述齋の建議により、其の總裁の下に行はれたる新編武藏風土記稿編纂の事業である。吉宗時代の探訪が僅かに青木昆陽等一兩人により、極めて短日月の間一局部に限つて行はれたに反し、是は極めて多數の人々と長き年月とを費し、廣く武藏一國に互つて極めて組織的の探訪が行はれた。又松平定常等の研究がい

と局部的散漫的であつたに反し、是は系統的、組織的で、必要の場所には係員を差出し、實地踏査を行はせ、村々よりは地誌書上げを差出させ、博く群籍を涉獵して、あらゆる歴史地理を研究記録した。大凡この事業の爲に人を費すことは數十人、年月を費すことは二十年に及んだ。その研究調査の結果は今日にても新編武藏風土記稿九十卷と、武州文書十八卷となつて残つて居る。殊に此の事業は寛政以來盛になりつゝあつた。地方史研究の風潮に動かされて起つたものであるべけれど、この事業起つて以來、武藏野の歴史地理研究の熱は一層盛になつた。この編纂事業に關與して居つた人々の、個人として残した副産物的著述も少くない。植田孟縉の武藏名勝圖會や、鹽野適齋の桑都日誌、柚保志等は其の一例である。吾人が今日餘り大なる苦勞なくして武藏野に於ける古文書、古記録の所在を知り、又容易に名所舊跡の來歴の大略を知り得るは、大

半は此の事業の御蔭である。吾人は此の事業を主唱した林大學頭は勿論、この事業に關與したる人々の恩恵を忘れてはならない。

然れども武藏國に於ける偽文書、偽記録、偽傳説等もこの機會に作られたものが少くないと觀察せられる。調査探訪の吏僚が來るからといふので、地方の人々の中には我が家門を飾るが爲に、豫め偽文書、偽記録を作つて待つて居たものが少くないと傳へる。しかし其等は今日にては極めて容易に看破し得られる。

* * * * *

近く明治政府に至つて内務省地理局にて武藏國誌編撰の業が行はれた。しかし其の勞も其の功も新編武藏風土記稿に比ぶれば餘り偉大ではない。加ふるに遂に書籍公刊の域に達せずしてその業を閉鎖した。

大盃武藏野

昔の作の大盃に武藏野と稱するものがある。其内部一面に薄の蒔繪を畫いてあつた。是を武藏野といふわけは、餘り大盃であるから、飲み盡さずといふに、野見盡さずといふをかけた洒落だといふことである。節用集大全に「酒盃大者曰武藏也。言野見不盡之意也」とある。

* * * * *

石田未得

盃の名に流れたる武藏野に富士をたぐへば蓬萊の花吾吟我集

第二篇 東京北郊—北豊島郡地方

北豊島郡略説

徳川時代以前の豊島郡

茲に所謂東京北郊とは、今の北豊島郡の大部である。北豊島郡は明治十一年豊島郡を分ちて南北兩郡とした際の遺稱である。南豊島郡は今の落合村より淀橋、代々幡を経て澁谷に至るの地方であるが、明治廿九年東多摩郡と合して豊多摩郡となり、北豊島郡だけ其儘残ることになつたのである。

昔の豊島郡の範圍は廣い。今の東京市の隅田川以西は大部分豊島郡内であつた。江戸赤坂一ツ木は勿論、阿佐布、飯倉、芝、金杉等の村々まで郡内

であつた。今の東京小石川護國寺の邊は今日まで豊島が岡と呼ばれて居る。延喜式内の豊島驛は今の東京市丸の内にあつたといはれる。

この郡は武藏野の内といへども、低地もあり、谷もあり、川もあり、且つ荏原郡と共に直ちに内海に接して居るが故に、武藏國內にても割合に早く開けたと思はれる。現に石器時代や古墳時代の遺跡の多いのも、武藏國內有數である。殊に今の東京芝公園内の丸山古墳や、上野公園播鉢山古墳の如き大古墳の散在するのを以て見れば、餘程有力のものが此地方に住んで居つたことは明である。

郡の名も割合に早く奈良朝時代の天平勝寶七年二月、史上に顯はれた。此時は筑紫に遣はさるゝ防人交替の時で、此の郡の上丁椋椅部荒虫なる者の出發に當り、其の妻の宇遲部黒女なるものが餞別の爲に、阿加胡麻乎、夜麻努爾波賀志、刀里加爾豆、多麻乃余許夜麻、加志由加也

良牟

〔解〕赤駒を山野に放ち置きて捕り兼ねるが故に、いと我が夫をば徒歩にて多麻の横山を越えさせることか、いたはしや。

といふ歌を詠したことが萬葉集に出て居る。續いて同じ奈良朝時代の神護景雲二年には、豊島驛のことが續日本紀に出て居る。豊島驛は附近の乗漕驛と同様山海兩路を承けて使命繁多であるから、驛馬を増して十匹としたいといふことを東海道巡察使より申出た。朝廷にては、尤もだといつて之を許可したといふことである。是にても、此郡の一部は早く其時代相當の文明に達して居つたことを知ることが出来る。

倭名類聚鈔―略して倭名鈔、或は和名抄といふ―といふ本は平安朝の中頃醍醐天皇の御代に源順の編述したものであるが、記述の内容は奈良朝の末期か或は平安朝初期のものだらうといはれる。この本によれ

ば、其頃豊島郡には日頭ひのと、占方うらかた、荒墓あらかはか、湯島、廣岡、餘戸の六郷と前述の豊島驛家とがあつた。今は是等の郷村の位置を一々指定することは出来ねど、何れ今の東京市内より、王子、板橋、石神井、志村邊にかけてあつたのであらう。當時の一郷は五十戸内外で、一戸の人数は二三人乃至五十人であつた。故に郡内の總戸数は三百戸内外で、人数は、かりに一戸平均三十五人とすれば、一萬四千人であつた。餘り戸数人口の多かつた郡でも無いが、小郡でもない、いはゞ中等の郡である。

平安朝の終りより武家時代にかけては豊島氏と江戸氏とが此の郡内に羽翼を擴げて居つた。今の北豊島郡内は即ち殆ど全部が豊島氏の勢力範圍であつた。豊島氏亡後太田氏の勢力が此の郡内に廣がつた。故に今も兩氏の遺跡が郡内諸所にある。江戸氏の勢力は江戸城を中心として重に其西及び南に廣がつた。

徳川時代の北豊島郡

徳川時代に至つては北豊島郡内諸所に幕府の狩獵場を置かれた。また郡内村々の多くは三代將軍家光の時代に至つて御手鷹師の知行に分ち與へられた。江戸上野東叡山領二千石餘も郡内に於て賜はられた。郡内村々はまた江戸の發達の影響を受けて新産業の發達したものが少くない。三河島白菜、練馬大根の名の高くなつたのは、ひとへに江戸發達の御蔭である。板橋宿の繁昌も江戸の發達が無ければ起らなかつた。寛政の頃古河古松軒は本郡を評して次ぎの如くいふた。

豊島郡を平均して右の二郡○多摩 荏原にくらべ見れば、大ひに勝れて別國のごとし。家居を初め、人物、言語もよく、別て日光御成道より荒川筋の村々は、田方數多にして土質上國の風土にして、五穀の實のり他國

に劣らず。中にては下村、神谷村、豊島村などは上方中國筋の土と少しもかわらず。草木村だち大上々國の風土にて僅か中國にかかわらず。植へものに紅花、空豆、藍なども見へ侍りし也。木綿なども作なば上方筋の如く生すべき土地なり。荏原郡、玉郡の土は壁土、竈土に用ひ難く、豊島郡の土は壁、竈土に用てよし。一國にしてかくまでに勝劣ある事大國の故なるべし。

如何にもよくほめはやされたものである。

* * * * *

著者は最初石神井城址に遊んだ。それから練馬、平塚等豊島氏の遺跡と傳へる地方を巡遊した。遂に岩淵、志村、赤塚等に遊んで本郡の大部分を歩き盡した。村々の産業の状態も一應は考察した。以下其の行遊の跡を記載する。大略山手線鐵道を境として其外部の郡内各地を包括する。但

し外部と雖巢鴨町等は一切之を省く。餘りに都びて居るからである。

瀧野川町

今でこそ人家が建連つて分らなくなつたが、古い地圖を取つて見ると、東京上野不忍池の北に續く低地の東北縁、丘陵の麓に若干の農家が點點相連つて居つた。又この丘陵の北邊荒川に面した田野にも若干の人家が散在した。是を田端、中里、上中里、西ヶ原など、名づける。更に不忍池低地の一番奥石神井川に近きあたりには瀧野川といふ部落がある。是等と其北舊十條村の一部とを總稱して今は瀧野川町と名づける。元は下つて水田を耕し、上つて陸田を耘る百姓村であつたが、今は其面影すらも殆ど見えなくなつた。しかし、此町には見るべき舊跡、遊ぶべき名所がなかく、多くある。

平塚城址と豊島氏

足利時代に出来た鎌倉大草紙といふ本には、文明九年四月十三日、太田道灌江戸より打て出で、豊島平右衛門尉が平塚の城を取巻、城外を放火して歸る。翌年正月二十五日、平塚の要害へ押寄せ攻めければ、其曉没落云々と書いてある。そこで先づ平塚城の詮議立てから始める。平塚とは今の田端、中里、西ヶ原邊を總稱したる名である。古記録に、江戸平塚の内中里、同じく田端、同じく西ヶ原など、記してある。今でも字上中里に平塚神社がある。この神社の境内が昔の平塚城の跡だといひ傳へる。今は只神社があるばかりで、城濠土壘の跡らしいものも見えないが、土地の人は今でも神社の傍の坂を攻坂と名づけ、其二町ばかり東の坂を勝坂と呼んで居る。而して太田道灌は攻坂より攻め上つて勝坂よ

り凱旋したのだと傳へる。一説には勝坂は攻坂の西で、今の農事試験場の中にあつたのだともいつて居る。元より適確の證據は無けれど、何れにしても城は此處か或はこの附近にあつたに相違あるまい。この平塚城は豊島氏代々の居城である。傳説には其昔豊島氏の先祖近義の築いたものだと稱せられる。豊島氏とは平安王朝の末頃から足利時代の中頃まで此の地方に勢力を振つて居つた豪族で、前篇に述べたる武藏武士の一派なる秩父氏の一族である。其の祖は村岡忠頼で、忠頼の長子秩父將常の子六大夫武常なるものが、始めて今の葛西、豊島の地方を領して、葛西、豊島二氏の先祖となつた。豊島近義は即ち武常の長男と傳へる。保元の亂に源義朝に従つて白河殿を攻めたる武藏の國の住人豊島四郎といふも此の一族と見える。頼朝の時代には豊島清光其子太郎朝經の名が顯れた。

其後豊島氏一族のものは附近の各地に廣がりて、板橋、瀧野川、赤塚、宮城などの苗字を名乗り、それ／＼苗字と同じ名の村に住んで居つた。また其の遺跡も王子、豊島、石神井、練馬等諸所にある。鎌倉時代の歴史を記したる吾妻鏡、南北朝時代の歴史を記したる太平記などにも、この一族の名が諸所に出て居る。近義が平塚城を築いたといふ説は容易には信賴し難けれども、この一族のものが中里、或は其近所に居つたことは明かである。而して足利時代の中頃には最も確かに平塚に居つた。それが文明九年乃至十年に及んで、太田道灌を相手にして一大騒動を惹起すに至つた。左に其始末を略述する。

平塚城の合戦

南北朝以來、我が國は下剋上ひくしやうといつて下の者が上の者を仆して是に代

るは、殆ど普通のことになつて居つたが、關東に於ては管領の足利氏と其執事上杉氏との間に、數代結んで解けざる確執があつた。今より約四百八十年前永享末年に至り、關東の足利氏は持氏を最後として一ト先づ亡されてしまつて、上杉氏が名實共に關東の支配人となつた。しかし關東の舊家なる諸豪族は上杉氏に従ふを肯じない。そこで上杉氏は止むを得ず、持氏の遺孤成氏を推し立てた。ところが間もなく成氏黨と上杉黨とが出来て、雙方すつたもんだの騒ぎの上、成氏は鎌倉を追ひ出されて下總の古河に立籠り、こゝに關東の勢力は、東、成氏方と、西、上杉方とに二分した。上杉方には、その山内家に長尾昌賢があり、扇谷家に太田道灌があつて、主として政を執つて居つた。扇谷上杉家では江戸、河越、岩槻の三城を築き、山内上杉家では今の埼玉縣本庄町の南に五十子の城を築いて、古河成氏方の野田、關宿、菖蒲などの城と相對峙して居た。

豊島氏は始めは足利氏に屬して上杉氏と戦つて居つたが、天下の形勢かくの如くになつてからは上杉氏に歸屬して居つたが如くである。ところが、山内上杉の家老長尾氏に内証が起つて、長尾景春は宗家と主家とに叛いて軍を起し、武州鉢形城―秩父鐵道寄居驛邊―に據り、遙かに古河の成氏と連合した。早くも文明九年正月には五十子の城も景春の手に歸し、上杉氏は上野に退却せざるべからざる様になつた。天下の形勢を見て去就を決するに敏なる小城主どもは、この勢を見て、景春に味方するものが頗る多くなつた。豊島氏もその一人であるが、この外神奈川附近なる小机の城主成田某、川崎附近なる丸子城主某、神奈川縣厚木町在なる小澤城主金子掃部助、八王子市の北方なる二宮の城主大石駿河守など、皆景春黨である。上杉氏の江戸城の周圍は皆反上杉黨となつた。中にも豊島氏の城は、この平塚及び練馬、石神井の三城で、敵の二大

根據地たる江戸、河越の通路を斷ち切つて、其勢力を南北に二分するの効果をあらはした。故に敵上杉の側からいへば、何としても、この間を突破して、江戸、河越の連絡を取らなければならぬ。

そこで文明九年四月十三日、敵の軍將太田道灌は江戸の城より打つて出で、豊島平右衛門尉の籠れる此の平塚の城を取り捲き、城外に火をつけて攻めた。是を聞いた平右衛門尉の兄勘解由左衛門尉は、石神井、練馬の兩城から兵を出して平右衛門尉を助けんとし、今の中野町の北なる野方村江古田の原で、道灌の軍と出會ひ、之と戦つて敗北した。續いて石神井、練馬兩城も陥つた。しかし、此の平塚城だけは依然として其勢力を維持して居つた。

其後道灌は暫くの間上野其他の方面の經略に従事して居たが、石神井城占領後約八個月を経て、愈、この平塚城を陥れんとし、文明十年正月二

十五日、河越城より今の埼玉縣北足立郡の膝折宿に著し、其翌朝兵を進めて城を陥れた。此時、豊島氏の逃ぐるを追ふて足立まで追ひかけたが、遙かに逃げ延びたから、晩に及んで江戸城に馬を入れた」と道灌が自らの功を記して人に知らせたる書狀―所謂道灌狀―に記してある。これにて豊島氏も遂に没落し終つた。是今より四百數十年の昔である。在來の書籍に「此時豊島氏は丸子、小机に逃げ延びた」と記してあるは誤である。豊島氏は是より暫く四方を流浪する身分となつたが、後小田原北條氏に仕へ、又徳川氏に仕へて麾下の士となつた。詳細は後の王子町豊島の條下に説述する。

中里、上中里部落

豊島氏没落以後は中里附近は勿論扇谷上杉氏の所領となり、江戸城太田氏或は其他の者の知行所となつて居つたに相違ない。されど其後小田原北條氏の時代に至るまでには屢、變化もあつたのであらう。今より約三百六十年前永祿二年の頃北條氏の臣下の知行役高を記したる北條家分限帳、或は小田原衆所領役帳といふ本に據れば、江戸平塚百廿一貫五百文は、葛西氏―清重の子孫か―の所領地となつて居つた。又平塚本郷三十貫文は太田道灌の子孫なる太田新六郎の知行所となつて居つた。この新六郎の知行所は、この外に江戸廣澤、志村、岩淵、豊島、比留方、長崎、雜司谷、阿佐ヶ谷、石神井、高田等、舊豊島氏の勢力範圍内に廣がつて居つた。これ或は先祖道灌以來相傳の知行所かとも思はれる。又中里には今の埼玉縣比企郡松山町附近なる松山舊城主上田案獨齋の知行も若干あつた。兎角北條時代諸士の知行所は前代に引續き非常に混同錯雜して居るので、明瞭に其範圍を區別することは出来ない。

徳川時代に至つても同様に大名旗本の所領知行の關係は甚だ錯雜であるが、此時代中里、上中里は共に初めは幕府直轄領となり、寛永以來、中里は全部上野東叡山寛永寺領となり、上中里は平塚明神領五十石を除き、他は全部山川氏の知行所とせられた。

中里も上中里も徳川時代の初めは農村としては割合によい土地柄で、今より約三百年前正保年中は水陸兩田各半々位を耕して居つた。正保元年の調査で中里は石高百七十八石五斗あり、其内九十五石九斗八升は水田で、陸田は八十二石五斗二升であつた。又上中里は總石高百七十七石八斗餘、内九十四石七斗三升一合が水田で、残り八十三石九升七合が陸田であつた。其後中里には若干の開墾が出来て、元祿前後には總石高百八十四石二斗三合となり、幕末天保の頃には二百三十石となつた。只上中里はどういふわけであるか、石高漸次減少して元祿前後には百

五十一石となり、幕末天保頃には百三十一石となつた。戸數は天保の頃中里は二十七戸であつたが、漸次増加して明治五年には三十五戸となつた。又上中里は天保中に五十三戸であつたのが、明治五年には七十一戸となつた。石高を比較すれば、中里の方が多かつたけれども、戸數を比較すれば上中里の方が多かつた。最近二十年前までは此地方は純然たる農村であつたが、今は殆ど東京市中と變らぬ程繁昌な土地となつた。

平塚神社の傳説

今、平塚神社社殿の後に一の塚があり、其の上に石碑が立つて居つて、昔源義家、義綱、義光が後三年役後京都に歸る時、此平塚城に宿泊し、城主豊島氏に厚遇せられ、御禮に鎧一領を贈つた。後豊島氏は其鎧を埋めて此

塚を築いたのであるとの意味を記してある。しかし此の話は元この宮の別當であつた城官寺の縁起に最も詳しく記してある。即ち左の通り。後三年役終りて義家義光兄弟都へのぼりたまふ時又平塚の城に御逗留あり、城主豊島氏にがしもてなし奉ること斜ならず。義家甚だその忠誠を感じたまひ、御鎧一領并御守本尊十一面觀音の像を豊島氏にたまはりてのぼりたまひぬ。豊島氏ふかくこれをあがめ以て家の寶とす。その後十餘年ありて、長治二年乙酉八月十八日義家朝臣御逝去あり。後十四年鳥羽院の元永年中豊島氏かつうは我子孫このよろひを著するに堪えざることをおもひ、且つは城の鎮守となさんため、城内清淨の地に此よろひを埋み、その上に塚をつき、以てこれをあらはしぬ。但王城將軍塚の例にならへるか。その塚具足塚とて今にあり。豊島氏又義家義綱義光の武功を思ひ、且つその遺風をしたひ、且

つは武運をいのらんために、その上三人やどり給ひし處を點じて社を立て影像をおさめ、時に及んで是を祭る。今の平塚三所の明神これなり。

この縁起は城官寺の法流開基第一代の眞惠なるものが、元祿五年五月に記したものである。事實の眞偽は兎に角傳ふる所は右の通りである。尙、豊島氏亡後は蘇坂兵庫頭秀次なるものが、此處に居つたと言ひ傳へる。秀次は名將の古跡をつゝし、社を修理し、塚を封じ、年々の祭禮を怠らなかつた。其死するや社の外に葬つたが、土人は秀次の石墳を崇めて石神明神といふたと右縁起に記してある。この蘇坂なるものは如何なる人であるか、元より分らないが、所謂石神明神も今はない。石神明神とはいふまでもなく、武藏各地に多くある石棒を祀つた神であらう。又義家、義綱、義光の具足塚といふも實は古墳であらう。而して平塚といふ地

名も此古塚から或は出たのであらう。この邊には古墳の数が相當に多くあつた。而してまた此邊より赤羽、志村、赤塚方面にかけては古墳の上に神を祀つた處が頗る多くある。

平塚神社の信すべき由緒

附山川城管と朽木植綱

上古はいさ知らず、近代に至つて、この神社の信すべき由緒は徳川幕府麾下の臣山川城管の家譜にある。それに據ると、寛永十年十月將軍家光が病氣であつた際、家光の左右に仕へて居つた城管は此神社に祈誓し、將軍の命に代らんことを願ふた。其爲將軍の病氣が直つたので、城管は神領として自らの田園を寄附し、別當の寺を建て、自らの號を取つて平塚山安樂院城管寺と號したといふ。是が此の神社に就いて信すべき記

録の始めである。此際社殿の建築も行つたと見えて、武江年表には、寛永十一年平塚明神社御建立、秋に至つて成就すとある。勿論この以前より小さな社殿はあつたのであらうが、立派になつたのは、此時からと見ゆる。この事は大體徳川實紀にも記してある。

城管は元は石龜氏、名は貞久、通稱は藤十郎、慶長十六年以來家光の側に勤仕し、後病により明を失し、檢校に補せられた人である。寛永十七年九月二十二日家光は王子放鷹の際この社頭に立寄り、城管の誓願により、社殿を建造したことを聞いた。而して翌二十三日酒井忠勝の別荘に臨んだ時、城管を御前に召し、此地方に於て采地二百五十石を賜ひ、内五十石は城管の乞ひに任せて平塚社領としたといふことである。

思ふに此の神社の西隣に將軍遊獵の殿舎があり、家光は屢、其處に遊獵したことがあるから、其等の縁で城管がこの神社に祈り、又社殿の建立

をすることになつたのであらう。城管の子孫は明治維新の前まで此地を知行して居つた。一説には城管はこの地の出身だともいふ。

悼山川檢校

澤菴和尚

一毫何變舊山川。箇裏陰陽曾不遷。今日齋筵別功德。峨々岩上直

行船。澤菴廣錄

又この神社拜殿の前面に寛永十八年十二月朽木植綱の寄進したる石燈籠がある。一基に左の文字を刻してある。

寄進石燈籠 平塚大明神御寶前

寛永十八辛巳歲十二月吉日 佐々木朽木民部少輔源植綱

朽木植綱は近江高島郡朽木谷の生れである。父元綱は織田信長、豊臣秀吉に仕へ、關が原の役には始めは西軍に屬し、脇坂安治等と共に松尾山の麓に陣し、軍半ばにして東軍に應じ、小早川秀秋の兵と共に大谷吉繼

の陣に切つて入つた人である。植綱は其の三男である。少より家光に仕へ御小性組の番頭などを勤め、非常に寵遇を受け、知行も一千石より三萬石まで加増せられた。家光に従つて舟山御殿―西隣遊獵の殿舎―に來たことも度々あり、其の爲に石燈籠の寄進もしたのであらう。

かくして此の神社は王子權現等と同じく、全く三代將軍家光時代に、この地方での大社となつた。其の後幕府の諸士の參拜するものも多く、元祿十四年四月廿五日には五代將軍綱吉の生母桂昌院も此處に參拜した。八代將軍吉宗の遊獵の際立ちよつたこともある。

境内は敢へて廣いといふわけでもなく、又建築物等に見るべきものがあるといふわけでも無いが、著者の始めて遊樂したる頃には、社前の道路の長くして少しく並木のあるのが、いさゝか奥ゆかしい感じを起させた。門前の石標には元は龜田鵬齋の撰したる城官寺縁起を刻してあ

つたが、明治初年排佛毀釋の聲の高かつた際わざ／＼叩きつぶしてしまつて、今は只其石標のみ残つて居る。

上中里城官寺と城官逆修の碑

平塚神社舊別當城官寺は神社前面道路の左方にある。真言宗新義派で東京小石川護國寺末である。古くは安樂寺といつて淨土宗であつた。今も境内墓地にある寛永四年丁卯六月廿七日法印賢慶菩提の爲の石塔を見れば、元より餘り小さな寺であつたとは思はれねど、前述の如く寛永十年の前後山川城官―家譜には城管とあり、碑石には、城官とある―の縁を以て今の名に改め、宗旨をも今の真言宗に改めたと傳へる。その當時の住僧は定惠といふ者で、明神社領五十石を得る爲には頗る大なる力を盡した。故に寺では昔より此僧を以て中興開山として居る。今も

境内墓地にある碑石には「就中定惠者城官寺中興開山先師、當社明神領本願主也。寛文元年十月十一日。云々」と刻してある。又同じ墓地中には山川城官逆修の爲に建てたる地藏尊像の大なる碑があり、像の左側には「奉造立地藏菩薩一体今世後世能引佛道而已」と刻し、右側には「施主山川檢校城官、没後戒名玉法院殿心譽高岸春郭上座、寛永十五戊寅六月二十四日欽言」と刻してある。又其傍には城官後室預修の如意輪尊の碑があり、「大聖如意輪一尊刻調。爲本譽妙感山川檢校後室預修菩提。昔慶安第四年辛卯孟秋上旬」の文字を刻してある。この外山川氏碑石小なるもの六基ある。しかしながら山川氏は此寺には葬地を営まなかつた如くである。城官は寛永二十年十一月死して牛込光照寺に葬られ、子孫の者は多く雜司谷法明寺中大行院墓地内に葬られた。而して此寺は却つて幕府の醫官多紀氏の菩提所とせられた。

城官寺檀家醫官多紀氏と其墓碑

多紀氏は元は兼康氏、丹波氏と同じく醫博士康頼より出で、代々多くは施薬使また典薬頭となつて京都朝廷に仕へ來つたが、玄泰某の時より徳川氏に仕へた。玄泰は慶安元年十二月死して池上本門寺に葬られたが、其子元尙は延寶四年十一月廿三日死して城官寺に葬られ、以來子孫代々此處を以て葬地とすることゝなつた。元尙四世の孫元惠は父元孝の代に起したる醫塾を改めて官の醫學館とし、多くの醫生を教育養成し、又幕府に建言して製薬所を刱建したる人である。其著述には廣惠濟急方、醫家初訓、養生大意等の書がある。享和元年五月十日死して此所に葬られた。

元惠は有名なる醫人である。又其墓表は大學頭林述齋の撰述で、屋代弘

賢の書であるから、左に其本文を掲載する。

尙薬永壽院多紀君墓表

大學頭林衡撰

醫官多紀廉夫述其考永壽院諱元惠字仲明之行實世次因其同僚杉本仲温以請曰多紀氏出於丹波世爲望族有康頼者名醫十八世裔兼康以善治口病爲典薬頭義子元泰傳其業自別爲兼康氏仕我烈祖避諱改金保氏其五世元孝改業本科請復多紀姓乃君之父也君少負氣夙以振家學自任覃思內經頗右張介賓之說時已穎然見鋒鏑迨後雖博涉諸家而最研精長沙之旨人有請輒往試之乃効遂名于時安永五年擢爲侍醫叙法眼天明八年陞尙薬尋叙法印夙夜精苦益勤歷事兩朝恩眷殊渥每侍君側而陳調攝之方或錄其說進之嘗言我之任獨臨病執七而止乎平時調護預防病源此要務也當直日偶得風疾昇歸私舍因請致仕再三乃獲允寢疾五載遂以享和元季五月十日歿年七十配松井氏子男六

人。長則廉夫名元簡嗣。次忠房。次元倭。共冒湯川氏。次元方冒山崎氏。次高雅冒大村氏。次元忠女三人。一嫁二天。君爲人聰悟有適用材。臨事堅忍無少屈撓。今大君承統初。改革舊弊。君建言汰冗舉能。醫院改絃。又請製藥所。以備進用藥餌。又脩飾醫學。使醫官子弟咸肄業而達材矣。初君之父私建醫塾。規制畧具。君善紹先志。積年拮据。又展拓之。其費皆出於俸餘。至家產爲之一空。而弗顧也。竟能變塾爲學。轉私爲公。上補朝典。下惠醫流。其生平所爲如此。今既葬君。城北平塚山城官寺先塋之側。而未敢以表諸墓也。敢因仲溫以請。余於仲溫雅素。而廉夫亦相識熟矣。不可不文辭也。乃爲次第其狀。更係以言曰。今之仕者皆得其秩。傳其業。以延子孫。是國家之深仁也。然而疇人子弟生長紛華。而往々狃汰世恩。自安尸素。其能樹立奮起不墜家聲。如君者可多得乎。廉夫亦學邃術精。流風相承。先後輝映。非得於家庭之訓者耶。則知多紀氏之後。將彌顯以昌矣。

内史局直事源弘賢書

元惠の子廉夫元簡の墓表は龜田鵬齋の撰書である。元簡また一代の名醫で、其著書には素問識、靈樞識、傷寒論輯義、金匱要略輯義、扁倉傳彙攷、脈學輯要等十數種ある。元簡の子元胤、其弟元堅、元佶等何れも一代に名があつた。凡そ此一家の學は支那醫學の訓詁考證を主とし、其亂雜なるを整理し系統立つるに大なる功があつた。當代の漢法醫家で、多紀氏一門の教を受けぬものは殆ど一人も無かつた位である。多紀氏一門の墓碑は總て一郭をなして數十基の多きに及んで居る。城官逆修の碑石には今は詣る人も無けれど、多紀氏墓石は依然として子孫のものによく守護せられて居る。

因みにいふ。元惠墓表は事實文編に載せられたものもあれど、脱漏多くして信じ難い。本書に載するものは直接碑石より寫し取つた

ものである。第七行陸字碑石には陸とある。今わざと改めた。

西ヶ原部落

西ヶ原は昔は平塚郷内であつた。地名の起りは平塚、中里の西方の原野であつたからであらうか。小田原北條時代の永祿二年には村内二十貫文の地は平塚藤右衛門なるものゝ所領であつた。又徳川時代に至つて文祿、慶長の頃は全部幕府直轄領であつたが、寛永頃より若干を山川城管、江戸雲光院、御手鷹師木村喜右衛門等に分け與へられた。正保中幕府直轄領は七十八石二斗六升二合、山川氏知行は七十六石三斗六升六合、雲光院領は五十石、木村氏知行は九石三斗六升八合で、別に江戸法恩寺領五石あつた。總石高合せて二百十八石九斗九升六合である。而して水陸兩田の割は中里、上中里と同様で、水陸殆ど相半ばする位であつた。即

ち水田は百十一石九斗一升二合、陸田は百七石八升四合であつた。故に土地柄は此地方としては中等の部であつた。

されど人口が増加するに従つて陸田の開墾が盛に行はれ、延寶二年幕府の檢地を受けて總石高三百六十九石二斗一升六合とせられた。某年更に再檢地せられて四百九十五石二斗二升七合餘となり、以て幕末に及んだ。勿論直轄領も諸家の知行も共に其割で増加して、直轄領は九十石三斗四升餘、雲光院領は百十一石二斗五升餘、法恩寺領は十石三斗餘、山川氏知行は二百三十五石四斗六升餘、木村氏知行は十石八斗餘となつた。又中頃から無量寺領と野間氏知行所とが數石づゝ出來た。戸數は文化、文政の頃は七十戸餘りであつたが、明治五年には八十七戸となつた。今は即ち東京市中と大差なき繁昌である。

西ヶ原御殿山

元、西ヶ原には徳川將軍遊獵の林地と殿舎とがあつた。其跡は上中里平塚神社の西方に續く丘地で、今農林省農事試験場、東京高等蠶絲學校等になつて居る。小字を御殿山と呼び、近頃まで林地になつて居つた。今でも此の東北の低地を御殿下といひ、西方を御殿前といつて居る。其昔は舟山と呼んで居つた。此處に御殿を設けたのは徳川三代將軍家光の時代で、家光は屢、此處に遊獵に來られた。慶安三年林羅山の作つた舟山茶亭記には、大君^光家講武之時相^シ此^ヲ攸^ニ擇^ヒ其^ヲ勝^ヲ以^テ爲^ス芟^ニ憩^ニ之所^ト。舊號^ス舟山^ト。乃命^ジ吏誅^ニ茅^ヲ經營^ス云々」と記してある。只其經營年代は明かでないが、寛永十一年平塚明神の修築があり、同十七年社領寄進のあつたのを見れば、既に此頃は御殿も出來て居つたのであらう。正保年度の地圖には明かに是

を記載し平塚御殿と名づけてある。恐らくは寛永初年の經營であらう。尙、舟山茶亭記に據れば、山の周圍には柵を廻らし、或は鷹を放ち或は犬追物を行つたといふ。徳川實紀其他の古書に將軍家王子狩獵とあるは多くは此處に來たものと思はれる。中にも正保四年十一月十三日の犬追物は、屢、あつた遊覽、狩獵の内、最も花々しかつた。仍つて左に其大體を記載する。

* * * * *

犬追物とは犬を放つて騎馬の者が馬を走らせながら之を弓で射取る武技である。是は武家の一大儀で、鎌倉幕府を始め足利幕府でも屢、興行したものであるが、世の亂れにより其儀も絶えはて、織田、豊臣時代にはやつたこともなかつた。只薩摩島津家では從來より此儀式を傳へて居つたので、今回其希望により此處に是を行ふことになつたのである。そ

こでまづこの年九月中に眞田幸政と多賀常長とに殿舎の普請を命じた。兩人は其の十六日實地を檢分し、早速工事に取りかゝつて、東西四十六間、南北十一間の棧敷を作つた。當日家光は午前八時には既に此處に到着した。座席の左右は金銀珠玉を以て飾り立て美々しきものであつた。陪觀を許されたる御三家、諸侯もそれ〴〵の座席に著座した。誠に物々しき場面であつた。やがて射手三十六騎、舍人一人づゝを従へて入場し、三組射終つて後家光の希望により、更に今一手行つた。犬十匹の内八匹まで射當てた。家光は非常に之を面白がつて、前例を破つて簾を高く捲き上げて觀覽した。やがて島津光久父子を召し、刀脇差等を賜はり、又演技者にはそれ〴〵の賜はりものがあつた。終つて家光は鷹を放ちながら午後六時頃城に歸つた。

* * * * *

慶安の頃に至つて更に此處に設備を整へ、四所に池を鑿ちて清水を湛へ、鳧、鷺、魚類を放ちて置いた。又其側に亭を設けて壽寧軒といひ、それより池の中嶋を通り、高所にある亭を遠望亭といふた。遠望亭は眺望の景に富み、富士、日光、筑波の山々を始め、千住大橋まで一目に見渡すことが出来たといふ。慶安三年家光は林羅山に命じて此處の景を叙述せしめた。是即ち舟山茶亭記である。正保以來引續き將軍の遊獵が屢、あつたと見ゆる。

されど其後はこの御殿も餘り用ひられなかつた。文化、文政の頃には既に松杉雜木の林となり、四町六反六畝二十七歩の地、只御林奉行支配の御林番が住んで居るに過ぎなかつた。御殿も何時の間にか取拂ひになつたのであらう。只池と中島の跡は最近まで残つて居つた。

* * * * *

明治の初年には此處に山林局樹木試験場を設けられた。次いで同二十三年に至り此處に農務局假試験場農事部を置き、二十六年四月には是を農事試験場と改むるに至つた。又同十九年十月には東京麴町内山下町にあつた蠶病試験場を此處に移し來り、其名も東京蠶業講習所といふたが、後之を東京高等蠶絲學校と改むるに至つた。

中里兔御用屋敷

御殿山と平塚神社を隔て、東南、西ヶ原と上中里舊兩村に互つて兔御用屋敷といふがあつた。東は上中里一番地より起り、西は同じく百十番地邊、淺野邸門前道路に及び、西は大道に近く、北は懸崖に臨んで居つた。面積總計一萬二千五百三十二坪、内西ヶ原にかゝること四千七百八十七坪、上中里にかゝること七千七百四十五坪であつた。此處は元は酒井

雅樂頭の下屋敷として賜はられた場所で、將軍家光なども折々は此處に來たのであるが、八代將軍吉宗の享保十年以來上地となつて幕府の御用屋敷と定められた。吉宗は家光に次いで遊獵の好きな人であつたから、此處にも屢々來つて騎射猪狩り等を行つた。徳川實紀には此處のことを中里の官園と記してある。

第一に享保十六年二月六日吉宗は此處に來りて侍臣六七名に騎射を試みしめた。侍臣皆馬を並べて居る内に野猪一頭前林より飛出した。浦上直方なるもの、馬前六七歩まで是を近づけ満を引いて一發した。其矢急所に中り、猪は平塚神社の前まで遁れて仆れ死した。吉宗は甚だ之を賞した。この時の事は服部南郭の記したものが、南郭文集の第四編卷六に委しく出て居る。直方は通稱彌五左衛門、紀州から吉宗に従つて來て仕へた人で、毎々狩獵の際には功を立て面目を施したものである。

この翌十七年三月二十七日にも吉宗は此邊に出遊し、此處にて近侍及び兩番大番の者どもに騎射を試みさせた。數年を経て元文元年二月にも此處にて猪狩りをした。徳川實紀寶曆四年閏二月十八日の條に「大納言殿○將軍世子家治王子のほとりに御遊あり、平塚明神の邊にて諸士騎射を閱し給ふ」とあるも此地のことであらう。同じ寶曆十二年四月十三日には將軍家治王子邊遊獵の途次此處にて諸臣の砲術を觀覽した。また寛政十一年三月廿一日には將軍家齊同じく王子邊遊獵の途次此處にて使番本多丹下しげあや繁文及び番士小普請組の者どもの砲術を觀覽した。

此所にはまた幕府の鳥見部屋があつて、平素は鳥見役の者が此處に出張して居つた。しかし徳川幕府の瓦解と共に此處も廢止せられ、やがて民間に拂下げられて畑地となつた。里人は此處を屋敷畑など呼んで居

つた。大正の初年までは淺野邸の外は殆ど人家も無かつたが、今は即ち殆ど空地の見出されぬ程人家が立ち並んで居る。

西ヶ原無量寺

西ヶ原にはまた無量寺と名づくる古寺がある。平塚神社正門前を南に下つた坂下である。新義眞言宗で、佛寶山西光院と號する。其開創の年代は明かではないが、徳川時代の初めには寺領八石五斗餘の朱印を與へられた。元は田端興樂寺末であつたが、五代將軍綱吉の時代に江戸小石川音羽の護持院末と改めたといふ。又昔は長福寺と呼んで居つたが、九代將軍家重の幼字長福といふを避けて今の名に改めたといふ。

元祿十四年四月廿五日將軍綱吉の生母桂昌院は平塚明神、王子權現等參詣の途次、此寺に立寄り參拜した。當時御供をした隆光大僧正の日記

には此時の事を記して「三之丸様昌院○桂四ツ半比より道灌山御出駕、平塚大明神へ御社參、次に王子權現御拜禮、御歸に西ヶ原長福寺へ御參詣云」とある。此時桂昌院に隨行した人々には秋元但馬守、加藤越中守、牧野周防守など歴々の大名が多かつた。越えて寶永三年九月廿四日には隆光は田端與樂寺、東覺寺より此寺に遊び夕食をする筈であつた。然るに途中晝時分になつて將軍より召出しの命に接し、大急ぎで此寺に立寄り、匆々にして立去つた。この時の事も隆光の日記に委しく記してある。隆光は桂昌院及び將軍綱吉に最も信賴せられたる名僧で護持院住僧である。隆光程の僧侶と是程の關係のある寺であるから、當時にあつても此寺は相當に榮えて居つたのであらう。本尊不動尊は昔より雷除の本尊と稱せられて居つた。又此處に阿彌陀堂があり、江戸近郊六阿彌陀の第三番として昔より榮えて居つた。――六阿彌陀のことは王子町豊島の條下に詳説する。――

の條下に詳説する。――
文化、文政の頃の堂宇は舟山茶亭の舊材を賜つて構築したのだと傳へる。されど、この堂宇は文政十二年二月十六日の火災で焼失した。其後再建して嘉永二年六月また焼失した。今の堂宇は何れも最近の建築で、本堂は明治廿三年に出來た。大師堂は同三十一年の頃に出來、玄關書院等は、大正二年三年の交に出來た。故に古寺でありながら、甚だしく古色に乏しい。只境内のやゝ廣大なものと、門前にある正徳四年三月の六阿彌陀第三番の標石とは奥ゆかしい感じを與へる。

西ヶ原貝塚

西ヶ原農事試験場の正門と向ひ合つた小路を南に下り、突き當つて左に長屋の立ち並んで居る處を突きぬけると、小高い藪の邊に貝殻の澤

山出る畑がある。又或は王子脳病院の西側を通る道を通る道を行けば、坂の下り口の邊に貝殻の粉の散亂して居る處がある。よく注意して見ると、貝殻の最も多く出る處は、王子脳病院地内と其南に續く昌林寺の境内とに互つて居る。是所謂西ヶ原貝塚で、早くから考古學者の間にもてはやされて居るものである。

貝塚とは太古の民族が海岸にて貝を取つて食ふて其殻を棄てた處である。鳥は飛ぶ。獸は走る。何れも捕るに困難であるが、貝類だけは逃げもせず、奔りもせぬから、野蠻民族は最も喜んで之を捕つて食ふたものと見える。されば諸所に此貝殻の塚がある。しかし其れが何れも元海岸其他の水邊であつた處である。

西ヶ原は今でこそ海とは二三里以上も離れて居るが、太古の時代に於ては上野不忍池の方面より淺い海が入込んで居つたのである。此の貝

塚の場處は丁度丘陵が斜面になりかゝりの處で、又日當りのよい處であるから、昔の人間は多くこゝに住み海に下つて貝を取り、それを食ふて其殻を此處に棄てたものであらう。

この貝塚は大森貝塚——實は大井貝塚——と共に日本では最も早くから學者の注意して居つたもので、故坪井正五郎博士を始め、其道の學者が種々の調査をした。最初これを發掘した場所は昌林寺の後庭で、貝殻の外、魚骨、鳥骨、獸骨、魚鱗、齒牙、角、石鏃原料、打製石斧、磨製石斧、石斧砥、凹き石、骨器、土器、土偶等を出したといふ。吾人は是等貝以外の遺物によつて、當時の人類の生活の状態、文化發達の程度等を推測することが出来る。今實地に就て之を調ぶるに、脳病院屋敷東隣の地内で、地中約三四尺まで一體に黒土で、其の黒土の中に貝類や土器の破片等が交つて居る。貝類には蛤、牡蠣、榮螺等の類が多い。昌林寺の後庭樹木の間は未だ人の荒

した跡も無いといふから、發掘したならば何か出るかとも思ふ。
此邊貝塚が多く西ヶ原農事試験場の内にもあつたといふ。

西ヶ原昌林寺

西ヶ原昌林寺は曹洞宗、東京淺草橋場總泉寺末である。補陀山と號す。古は補陀落壽院と稱したが、應永十八年足利持氏再營して昌林寺と改め、文明十八年太田道灌は田園若干を寄進したと傳へる。されど其眞僞を判斷すべき證據はない。本尊は末木觀音と稱し、江戸近郊六阿彌陀彫刻に用ひたる木の末木を以て彫刻したと傳へる。故に寺をまた末木觀音堂ともいふ。

寺の後庭前述の貝塚の邊には、文明十七年八月と大永八年閏九月三日との板碑がある。この兩板碑は寛政十二年の頃江戸下谷坂本村高岩寺

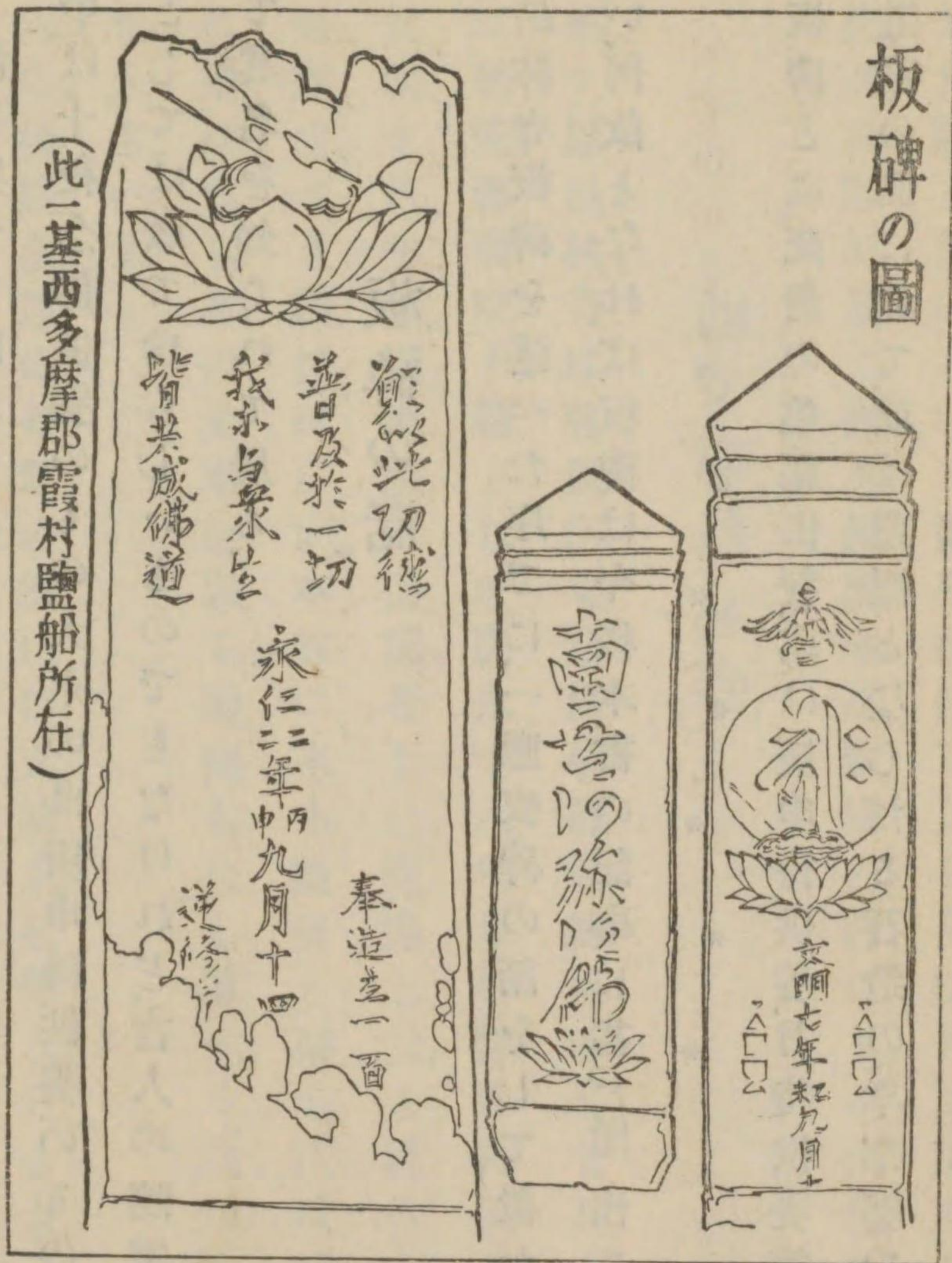
で池を穿つた際地中から出たもので、後此處に移したのだといふ。文明のは十夜念佛供養のもの、大永のは庚申待供養のものである。共に板碑としては敢て珍らしいものでもなければ、古人の隨筆にも載つて居つて其名を知られて居る。

板碑の話

昌林寺板碑を述べた序でに、一應板碑の話をして置かなければならぬ。何故となれば板碑は今後本書の記事に甚だ屢々出て來るからである。

* * * * *
板碑とは死者の追福供養、或は庚申待供養、月待供養等總て佛事の爲に道路の側に建て、或は墓標となしたる石造の卒都婆である。平つたい板の様な石で作るから板碑といふ。されど實は石卒都婆など呼ぶのが適

板碑の圖



一五四 當である。其形は上部を八形の三角状に作り、其下に二條の深彫り線を横にひき、更に其下に梵字若くは佛像經文等を刻み、猶下部に花瓶、寶塔、年號、戒名、施主名等を添へ刻するのが普通である。其石材

は處によつて違ひがあれど、關東邊のは多く秩父青石を用ひて居る。昌林寺にあるものも其れである。其大さは幅五六寸、長さ一尺五寸位より始まり、幅七八寸、長さ二尺餘りのものが最も普通である。大なるものに至つては幅二三尺、長さ九尺餘り、厚さ數寸に及ぶものもある。學者の調べによると、此石の最も多いのは關東八國で、關西地方には極めて少く、從來は阿波、筑前等に發見せられたばかりだといふ。東北地方にも餘り多くはない。關東八國の内でも房總には極めて少い。著者の經歷したる地方にては武藏の西部山裾に最も多くある。何時の頃から此板碑が作られる様になつたかは明かではないが、一般には埼玉縣北足立郡石戸村石戸堀の内東光寺内にある貞永二年のものなどは、最も古きものゝ一つに數へられる。又本書記載の範圍の武藏野に於ては、北豊島郡志村延命寺にある建長四年のもの、同村小豆澤龍福寺にある建長

七年のもの、入間郡山口村堀内來迎寺にある同八年のものなどは、現今存在するもので最も古き部類である。恐らくは鎌倉時代以前には無かつたのであらうか。最も多く発見せられるものは、南北朝から足利時代中頃までのもので、其後漸次少くなり、享祿・天文年中のものは甚だ少い。著者はまだ天正の年號のある板碑を見たことはない。入間郡越生の地方にては、今も此石を墓碑に用ふれども、既に在來の板碑に備はる形式を失つて居る。

著者は板碑については二三の逸話をもつて居る。或る地方の舊家にては、何處からか板碑を拾ひ來つて我祖先の墓碑と稱し、佛壇に飾つて尊重して居るのを見た。又或地方の寺院にては板碑の表面を削り、近世の年號を改め刻してあるのを見た。又平安朝時代の年號を改め刻してあるのも見た。板碑にも偽作は免れないのである。

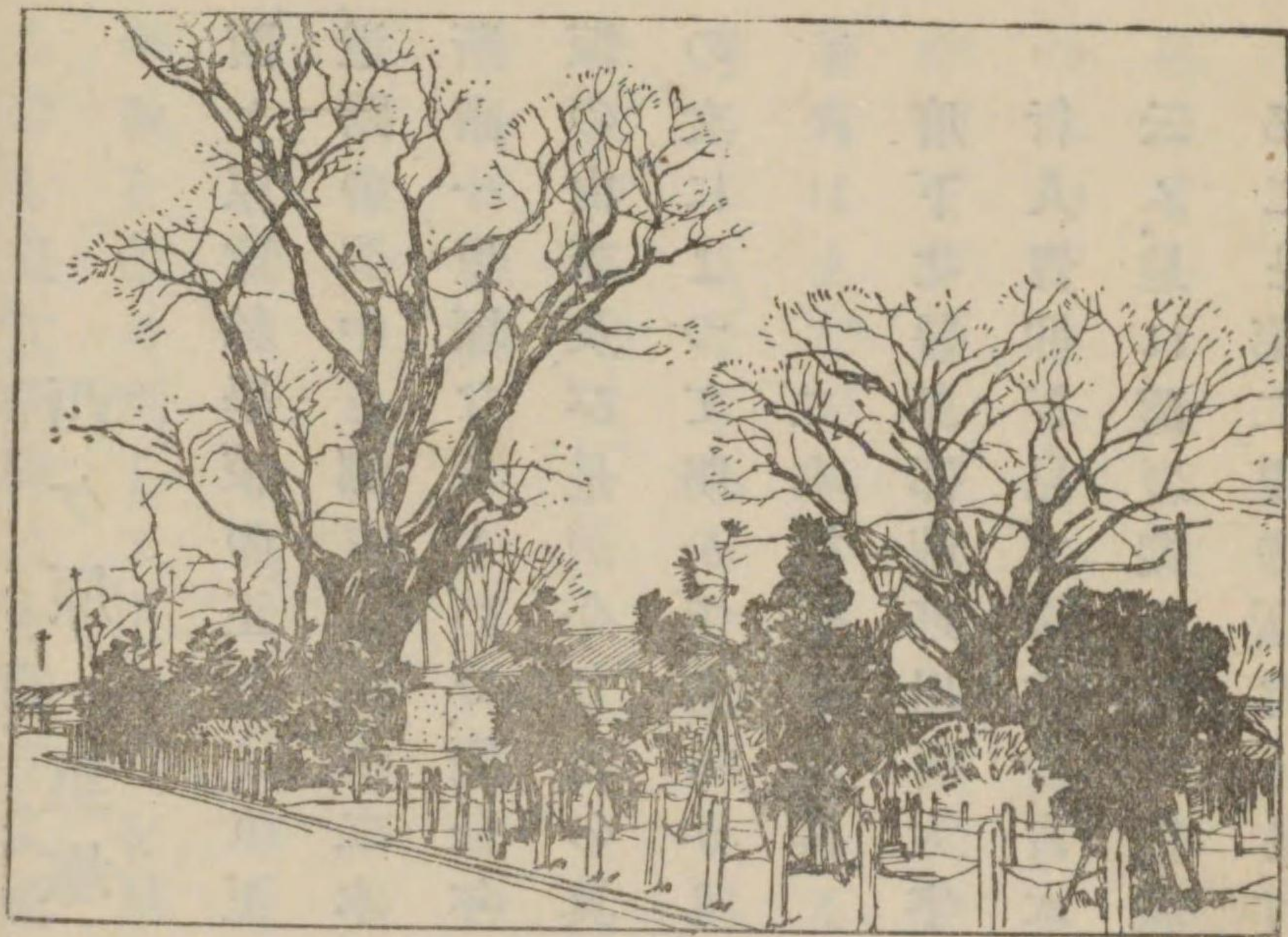
西ヶ原一里塚一名二本榎

西ヶ原蠶絲學校の正門より王子飛鳥山の方面に向つて少しく行けば、道路の真中と側とに大小二本の榎が相向つて立つて居るのを見る。是所謂一里塚なるもので、慶長年中徳川氏の造つたものである。この一里塚の由來、及び是が今日道の真中にある理由は、この木の下にある石碑の文によつて明かであるから、今それをこゝに掲載する。

二本榎保存之碑

公爵徳川家達題

府下北豊島郡瀧野川町大字西ヶ原に、幹太く枝茂りて緑蔭地を覆ひ、行人皆仰ぎ見て尋常の古木に非ざるを知るものあり、之を二本榎と云ふ。是れ舊岩槻街道一里塚の遺存せるものにして、日本橋元標を距ること第二里の所なりとす。往昔、群雄割據の世、道路久しく梗塞せし



大正六年頃の本榎

が、徳川氏覇府を江戸に開くに當り、先づ諸街道の修築を命じ、道を夾みて松を植ゑ、里毎に塚を置き、塚には榎を植ゑしむ。之を一里塚と云ふ。然るに年を経て塚多くは壞れ、榎も亦斧斤の厄を免れず、今存するもの甚少し。二本榎は實に其存するもの、一なり。先年東京市は電車軌道を王子驛に延長せんと企あり。一里塚も道路の改修と共に撤廢せられんとせしが、幸にして市の當事者、學者故老の言を納れ、塚を避けて道を造

り、以て之を保存せんと議を決したり。法學博士男爵阪谷芳郎君東京市長となるに及び、將來土地の繁榮と共に車馬輔轡りんれ、老樹の遂に枯損せん事を虞り、瀧野川町長野木隆歡君及び有志者と謀る所あり、男爵澁澤榮一君最も力を之に盡し、篤志者の義捐を得て、周辺の地を購ひ、人家を撤して風致を加へ、以て飛鳥山公園の附屬地となせり。阪谷市長職を去るに及び、現市長法學博士奥田義人君亦善く其事を繼承す。今茲工成りて碑を建てんとし、文を予に囑せらる。予嘗て大日本史料を修め、慶長九年の條に於て一里塚の由緒を記したる事あり。又此樹の保存に就きて當路者に進言せし緣故あり、乃ち辭せずして顛末を叙すること此の如し。惟ふに史蹟の存廢は以て風教の汚隆を見るべく、以て國民の文野を卜すべし。幕府治平を講ずるに當り、先づ施設せる所のもの、今や纔に廢頽を免れて帝都の郊外に永く記念を留め

んとするは、實に澁澤男爵、兩市長、町長及び諸有志者の力に頼れり。老樹若し靈あらば必ず諸君の惠を感謝せん。後の人亦諸君の心を以て心となさば、庶幾くは此史蹟を悠久に保存することを得ん。

大正五年六月

文學博士 三上參次撰

阪 正臣書

大正六七年の頃著者が遊びに行つた當時には二本ながらに此の榎の木が茂つて居つた。然れども世の中の無常轉變は誠に迅速なもので、大正九年か十年頃の寫真によれば、道路の中央にある大榎は枯れかゝつて甚だ勢のないものとなつて居る。やがてそれが全く枯れ果て、大正十二年の地震に仆れた。其後昭和二年十月九日著者が再び遊びに行つた時には既に影も形もなく、只醜き枯れ株の僅かばかりが哀を止めて居るのみであつた。保存碑の前面には材木を多く積み重ねてあつた。公

徳販賣の銘を記したるゑはがき販賣の函も壞るゝがまゝに任せてあつた。塚の前後に植ゑたる松も只生きて居るといふのみであつた。思ふに道路改修の爲に榎は根をせめさいなまれ、其後引き切りなしに通る車馬輻輳の爲に刻一刻と其生命を縮められ、遂に悶死したのであらう。あはれ大榎よ。今も道路の中央にある小さき榎は、其後の補植である。しかも補植の第二代目である。

一里塚の話

前節述ぶる所にて西ヶ原二本榎の由緒因縁も分つたわけである。二本榎の一本は枯れて今はもののあはれを止めて居るに過ぎないが、せめて塚の形の残つて居るのを幸に、この際一般に一里塚の話は今少しく